

### 3. 歴史的環境

#### (1) 甲府城の歴史

##### 1) 築城前史

甲府城は愛宕山に隣接する一条小山と呼称された独立丘陵に築かれた織豊系城郭である。一条小山は、愛宕山に連なる小山であるが、すでに中世以前から藤川の浸食などにより愛宕山との繋がりを断たれ、独立丘陵として存在していたと推定される。

この一条小山とその周辺には、平安時代末期に甲斐源氏の武田信義の子忠頼の所領となった。忠頼は一条氏を称し、一条小山に屋敷を造営した(『甲斐国志』巻78)。一条忠頼は、父武田信義、叔父加賀美遠光、安田義定らと共に平氏や木曾義仲との合戦で戦功があり、甲斐源氏の中心的な存在であった。ところが、元暦元年(1184)6月16日、源頼朝に謀叛の嫌疑をかけられて謀殺された(『吾妻鏡』)。その後、一条氏は甥信長が継承することで存続が認められている。

忠頼謀殺後、一条小山にあった館は忠頼未亡人が出家して尼となり、館を尼寺に改めたといわれる。その後、一条信長の子時信は、時宗の遊行上人(他阿真教上人)に帰依し、弟の法阿弥陀仏をその弟子にしたほどであったという。正和元年(1312)に時信は、一条忠頼未亡人が残した尼寺に法阿弥陀仏を開山として招き、ここを尼寺から時宗の道場とし、一蓮寺を創建した(『甲斐国志』巻73)。一蓮寺は、鎌倉・室町期を通じて繁栄し、寺が所在した一条小山周辺には、その門前町が展開した。「一蓮寺過去帳」によると、南大門・東大門・横大門・西町屋・横町屋などの地名が確認でき、一条小山の南麓から西にかけて、東西南北それぞれ数条の街路によって区画された町場であったと推定されている(秋山敬「一蓮寺門前町の成立」『武田氏研究』19号)。

永正16年(1519)武田信虎は、それまで本拠としていた川田の守護館を廃し、甲府に新たな居館を建設することを企画した。信虎の甲府建設は、一蓮寺門前町を包摂しつつ、有力家臣の城下集住、寺社の移転や新規造営、市場の開設を伴う大規模な事業であった(数野雅彦「戦国期城下町甲府の景観復元」『山梨考古学論集』Ⅱ)。武田氏の新館建設は同年8月15日から始まり、12月20日には信虎が川田から甲府の新館に転居している(『高白斎記』)。信虎は、本拠地甲府の建設とあわせて、その防衛施設の整備にも着手し、躑躅ヶ崎館(武田氏館)に自身が移転した翌永正17年(1520)に積翠寺丸山に要害城を、大永3年(1523)に湯村山城の普請をそれぞれ行った(『同前』)。さらに信虎は、甲府の南側防衛のため、独立丘陵であった一条小山に注目し、ここにも砦を建設することを企図した。大永4年(1524)6月16日、武田氏は一条小山砦普請を開始した。そこで問題になったのは、山上にあった一蓮寺の処遇であった。信虎は、大永6年(1526)4月27日に一蓮寺を小山原に移し、新一蓮寺建立に着手している(『同前』)。これ以後、一条小山は武田氏の本拠地甲府の南側防衛の拠点として重視された。

武田氏は、信虎・信玄・勝頼と三代にわたって甲府を本拠地としてきたが、天正9年(1581)1月、勝頼は本拠地を躑躅ヶ崎から新府(現韮崎市)へ移転することを決定した。同年9月には新府城が落成し、11月から12月頃には勝頼自身が入城した。しかし、天正10年(1582)3月に織田信長・徳川家康の侵攻を受け、天目山(現甲州市田野付近)での勝頼の自刃によって、武田氏は終焉を迎えた。

## 2) 築城から廃城まで

武田氏滅亡後、甲斐を領有した徳川家康は、甲府を再び国の中心に据え、重臣平岩親吉を配備し、信濃の真田氏やその背後に控える越後の上杉景勝の動向を監視させた。さらに、天正12年(1584)小牧・長久手の合戦が勃発すると、家康は豊臣秀吉に対抗する根拠としても甲斐を重視した。しかしながら、徳川家康が武田時代以来の伝統を持つ甲府中心の防衛システムを改変しようとした形跡は窺えず、徳川氏の豊臣氏臣従以後も、天正17年(1589)9月18日に、甲斐・信濃衆を動員して「甲州東郡二城普請」を実施したことが確認されるだけである(『家忠日記』)。なお、徳川氏が甲州東郡で築城した城は浄古寺城といわれている(『日本城郭大系』8巻)。これは豊臣秀吉と関東の北条氏との対立が激化したことを背景に、徳川氏が甲斐防衛の強化を図ったものであろう。

しかし、豊臣氏と北条氏の対立は、秀吉が甲斐防衛の強化を家康に命じる契機ともなった。徳川家康は、小田原出兵前夜の天正17年1月27日、甲斐に在国する重臣平岩親吉に書状を送り「一条小山地形之儀、其国之諸侍相候、普請可申付候、石垣積近日可差遣候之間、油断有間敷候」と指示した(『新修徳川家康文庫の研究』)。このことから、天正17年になって初めて、豊臣秀吉の意向を受けて徳川家康が石垣を基調とする織豊近世城郭の建設を実施しようとしたことや、またその場所が一条小山であったことが明瞭である。また、城普請の開始予定時期は同年4月25日に甲州東部の八幡神社神主宛に発給された徳川四奉行連署状写によると「自五月二日、同十一月まで十日御やといに候、於府中御城普請可被致之旨、可被相触者也」とあることから、5月であった可能性が高い(『新編甲州古文書』1104号)。だが、豊臣氏の小田原出兵により、徳川氏による一条小山普請(甲府築城)は中止されたと思われる。そして、翌天正18年(1590)8月1日に家康は関東に移封された。

徳川家康による一条小山普請(甲府築城)は頓挫したが、一条小山に石垣を基調とした織豊系城郭を建設する計画そのものは、天正18年(1590)以後、甲斐に入国した豊臣大名によって引き継がれた。豊臣秀吉は、関東に移封した徳川家康を封じ込めることを意図し、その拠点として特に甲斐を重視した。それは甲斐国主に任命された豊臣大名が、いずれも豊臣一族か、もしくは重臣が配置されたことから窺われる。しかも、東国の多くでみられた複数の大名による分割支配ではなく、甲斐一国を一人の大名に支配させる方法を採用したことにも、秀吉の甲斐重視の姿勢を読み取ることもできよう。豊臣時代の甲斐国主は、羽柴秀勝(秀吉の甥)、加藤光泰(秀吉重臣)、浅野長政・幸長親子(秀吉一族、重臣)と推移するが、通説によれば、甲府築城は彼らの手によって進められ、慶長5年(1600)ごろまでにほぼ完成したとされている。

徳川氏以後、甲府築城に手を染めたのは、羽柴秀勝であったといわれているが、天正18年(1590)8月3日に、甲府桶大工勝村氏に対して伝馬役免許と引き換えに、「当城御用」のために動員することを通達した羽柴秀勝の文書が唯一の事例である(『山梨県史』資料編8所収史料1号)。だが、秀勝の甲斐在国はわずか八ヶ月あまりで終焉を迎えた。秀勝生母の嘆願により、天正19年(1591)3月頃、秀吉は秀勝を美濃国岐阜へ移したのである。このため、城普請の事業は、加藤光泰に引き継がれた。加藤氏は、天正19年(1591)10月19日甲斐の柚衆に「当城江召遣」うために諸役免許の特権を与え(『同』史料63号)。

さらに翌 20 日には下山大工衆に動員の通達を出し（『同』史料 64 号）、さらに 26 日には杣・大鋸衆 147 人の諸役免許を通達している（『同』史料 65 号）。

天正 19 年（1591）9 月に豊臣秀吉が朝鮮出兵を諸大名に通達すると、加藤光泰もこれに従軍すべく、翌 20 年（1592）2 月下旬に甲斐を出陣し、やがて朝鮮に渡った。光泰の留守中も城普請は続いており、朝鮮に在陣中の光泰もそのことを気にかけていたらしく、文禄 2 年（1593）1 月 14 日に、留守居役として甲府に残留していた一族・重臣加藤光政・光吉に対し「其国ふしん去年ひかしの丸石かき出来候や、此表之事、上様御存分ニ申付候て帰国仕、城をやかて見可申候」と尋ねている（『同』史料 157 号）。このことから、文禄元年（1592）には「東の丸」の石垣普請が実施され、光泰は帰国して城普請の出来栄を見るのを心待ちにしていたことが窺われる。ところでこの「東の丸」の場所や、羽柴秀勝・加藤光泰の城普請を示す資料に登場する「当域」とは、甲府城ではなく武田氏館を指すものだという説が近年提起されている（数野雅彦「甲府城築城関係資料の再検討」『甲斐の美術・建造物・城郭』所収）。この説は、大州藩の藩史である『北藤録』に、「古府中の城」（武田氏館）を加藤光泰が普請を実施し、その際に加藤氏が植栽した竹が「遠州藪」（加藤遠江守光泰にちなむ）として残されていることが記され、これに対し甲府城は浅野氏が築いたとあることも有力な傍証とされている。

文書の記載には誤記や解釈によって広範な捉え方ができるが、平成 2 年度から 15 年度の整備に伴い実施された史跡甲府城の発掘調査から羽柴秀勝の存在を示す桐紋瓦や金箔瓦が本丸周辺で認められとともに、天正期の織豊系城郭で流行した三葉均整唐草紋を施す平瓦や、中世的な要素を持つ丸瓦なども発見されており、これらの出土品は浅野以前の様相が窺われるものである。これらの状況から羽柴秀勝が赴任する天正十九年の段階では既に本丸周辺に建物があつたことも推察される。石垣の部材として使用された栗石や積石には、一蓮寺に関連したと考えられる石仏や石塔、石臼なども発見されており、築城以前の状況も推察することができる。明らかに浅野時代以前の出土品が認められる一方で、浅野家の家紋「違い鷹の羽」の施された瓦と、これに伴う五葉均整唐草紋が施された平瓦が発見されており、浅野長政、幸長親子の痕跡を見ることができる。また遺構では、現状の石垣の中に別の石垣が隠されている地点などもあり、その造築年代については判断の分かれるところもある。

加藤光泰は、文禄 2 年（1593）閏 9 月に朝鮮から帰国することとなり、釜山の西生浦に在陣していたが、8 月 26 日の夜半に酒宴から帰ったところ体調を崩して重篤となり、同 29 日に急死した（享年 57 歳）。光泰は、死の前日の 28 日、浅野長政に宛てて遺言状をしたため、甲斐国は豊臣政権にとって枢要の地（かなめの地）であるので、若輩の作十郎（加藤貞泰）ではこの支配を担うのは無理であるため、これを直ちに収公し、他の大名に与えるよう秀吉に言上してほしいと依頼している（『山梨県史』資料編 8 所収史料 168 号）。このため秀吉は、光泰の遺児加藤貞泰を文禄 3 年（1594）1 月 17 日付けで美濃国黒野に移し、後任の甲斐国主に一族浅野長政・幸長親子を任命した。

甲府城の築城は、浅野氏による甲斐の支配体制整備の一環として実施された。また特筆すべきは、同時期に平行して浅野氏は、都留郡（郡内）において勝山城の築城をも実施していることである。甲斐に築城された石垣を用いた織豊系城郭は、甲府城と勝山城の二件だけであるが、その両方に深く関与していたのが浅野氏である。浅野氏は、文禄 3 年（1594）

6月20日から大鋸引・杣への動員を実施し、また甲斐国内への夫役を賦課しており、『同』史料234～266号)、同年12月には材木調達のため郡内の山造衆や百姓らに動員をかけている(『同』史料253・256号)。これが浅野氏による甲府築城の記録とされている。

ところが、文禄5年(1596)2月12日に杣・大鋸中に対して諸役免許の印判状を発給した後に、浅野氏による甲府築城関係資料はしばらく姿を消す(『同』史料274号)。これは、浅野幸長が豊臣秀吉の勘気を蒙り、能登に配流されたことと関係があると推測されている。その後、浅野幸長が慶長3年(1598)1月9日に、在陣中の朝鮮から甲斐に残留していた浅野忠吉に送った条目において、甲府城普請には甲斐に残留している侍はもちろん、草履取りまで動員して実施するよう指示していることから、まだ完成していなかったことが知られる(『同』史料303号)。そして、慶長5年(1600)までにはほぼ完成していたと想定されている(『甲府城総合調査報告書』等)。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で、徳川家康が石田三成らを破って天下の覇権を掌握すると、徳川氏は東軍についた浅野長政を紀伊国に移し、家臣平岩親吉を甲府城代に配置して、城の修築を実施したとされる。慶長8年(1603)には、家康の第九子義直(五郎太、義利)が25万石で甲斐国主に封じられたが、自身は家康とともに駿府に滞在し、甲府には在城せず、甲斐は引き続き甲府城代平岩親吉の手に委ねられた。慶長12年(1607)、義直が尾張国に転封されると、平岩親吉も附家老として尾張犬山に移った。幕府は、同年8月15日に、甲府城を平岩親吉から小田切茂富・桜井信忠(武田遺臣、徳川四奉行)に引き渡すよう命じ(『山梨県史』資料編8所収史料421号)、以後は城番制による管理下に置くこととした(第1次甲府城番制)。

その後、二代将軍秀忠の次男忠長が元和2年(1616)(一説に元和4年)甲府城主となるが、これも江戸に在府したままで自身は在城せず、寛永9年(1632)に改易されるまで甲府に赴くことはなかった。なお、忠長改易に伴い、家老であった郡内勝山城代鳥居成次も改易処分となった。こうして甲府城は、再び城番制の管理下に置かれた(第2次甲府城番制)。

この城番制は、上級旗本2名が1年交代で担当したが、同一人物が数年後再任される場合もあった。なお、この第2次城番制は、寛文元年(1661)まで、29年間に及んだ。

寛文元年(1661)、幕府は三代将軍家光の三男綱重を甲府城主とし、甲府藩(徳川氏)を創設させた。綱重は、寛文4年(1664)に幕府より2万両の援助を受けて、甲府城の大改修を実施している。この大改修工事は2年余に及び、稲荷櫓などが再建され、甲府城は偉容を取り戻したと推定されている。また徳川綱豊(綱重の子)は、元禄8年(1695)にも甲府城の修復を実施しているが、その規模や内容は不明である。

その後、甲府藩(徳川氏)は綱豊が五代将軍綱吉の養子となったため、解体されることとなった。そこで幕府は、宝永元年(1704)、柳沢吉保を甲府城主に任命した。吉保自身は、将軍綱吉の側用人として江戸に在府したため甲府に赴任しなかったが、宝永3年(1706)から甲府藩(柳沢氏)は大規模な甲府城の改修を行っている。この時の普請により、甲府城の北側に新たな曲輪(花畑)が造成され、また甲府城の建物や曲輪の名称、城下町の名称などの改称が実施されている(『楽只堂年録』)。柳沢氏による甲府城の改修は、同年(1706)にはほぼ完了したようであるが、正徳3年(1713)には、水害によって破損した石垣・堀などの修理が行われている。このように、江戸時代の甲府城は、甲府徳川藩と甲

府柳沢藩によって大規模な改修が実施され、文禄・慶長期の築城以来の偉容を取り戻したのであった。

享保9年(1724)、幕府は吉保の子柳沢吉里を大和郡山に転封し、以後幕末の慶応2年(1866)まで甲府勤番支配によって甲府城は管理された。だが、甲府城は享保12年(1727)の大火によって、本丸御殿・銅門を始めとする城内の建造物の多くが焼失した。これ以後、焼亡した城内の建造物のほとんどは再建されることはなかった。

幕府は、慶応2年(1866)以後、明治維新まで甲府城代を設置したが、大政奉還によってその支配を終え、明治元年(1868)に官軍によって接收された。

### 3) 明治期から平成期まで

#### ア 明治期

幕末、偽勅使事件を経て幕府直轄地であった甲府城は対応を協議していた。明治元年(1868)3月官軍東海が甲府にやってきて、甲府城の明け渡しを要求する。甲府城番は大急ぎで退去し、その翌日には官軍が城内を一般開放し、板垣退助らが入城する。城内の破損建物を廃し、番人を削減する(明治3年(1870))。

甲府城は明治5年(1872)に陸軍省管轄となり、翌年には内城を保存し、二の堀・三の堀内については市街地化が決定された。この陸軍管轄下において明治9年(1876)までには城内に残る主な建物・土塀の撤去・払い下げが行われる。

明治6年(1873)に県令に着任した藤村紫朗は、新市街を建設するため、二の堀、三の堀の埋め立て(明治8年(1875))、その旧郭内の小道に沿って桜町などの新しい町を生み出し、「藤村式」と呼ばれる洋風建築により町並みを飾る。また、明治9年(1876)には、二の堀内跡地に甲府師範学校、県勧業製糸場、裁判所、県病院、さらに翌年大手役宅に山梨県庁舎を建設する。

甲府城内城部においては、明治6年(1873)に城内を開墾し桑桐を植え、明治7年(1874)には楽屋曲輪書院にて養蚕を実施するほか、勧業製糸場建設のための煉瓦石製造所を城内に設置し、それに伴い柳門を閉鎖する。

その一方で、明治7年(1874)および翌8年(1875)に甲府城の「古跡」としての価値を活用した公園整備を計画する。しかし、この計画が不許可とされたことを受け、藤村は方針を転換し、山梨県の殖産興業の一環として勧業試験場を明治9年(1876)に設置し、内城のほぼ全域を開墾して植樹を、翌明治10年(1877)には鍛冶曲輪に葡萄酒醸造所が建設される。明治13年(1880)には明治天皇巡幸に際し、勧業試験場の視察が行われ、天守台に玉座が設けられ県土の景色を眺めている。

明治33年(1906)、楽屋曲輪に甲府中学校が建設され、また、屋形曲輪は校庭として利用されることとなるが、その城郭としての形態は依然として維持されてきた。しかし、明治29年(1896)に甲府城内城部の清水曲輪が甲府停車場建設のため鉄道院に割譲され、明治36年(1903)には中央線が甲府駅まで開通したことにより、清水曲輪の大半と花畑の一部は消失し、市街化の波は甲府城の内城部にも及ぶこととなった。そのような中、天守台・本丸・二の丸・稲荷曲輪・数寄屋曲輪・鍛冶曲輪などを含む約27,600坪の範囲は舞鶴城公園として明治37年(1904)に一般開放される。

明治39年(1906)の一府九県連合共進会開催に伴って、天守台には電飾された模擬天守が一時的に建てられたほか、鍛冶曲輪南側の内堀に遊亀橋が、稲荷曲輪には迎賓館

の機山会館が建設された。

## イ 大正期

大正 6 年（1917）、舞鶴城公園を含む 37,209 坪の範囲が国から払い下げられ、村松甚蔵氏の寄付により県有財産となる。大正 6 年（1917）7 月の山梨県議会において、明治 40 年（1907）の大水害など、度重なる水害による復興のため、明治 44 年（1911）に明治天皇が御料林を山梨県に下賜したことに感謝して、「御料林御下賜謝恩碑」の建設が決定され、建設場所として甲府城跡本丸が選定される。謝恩碑の建設は大正 6 年（1917）12 月に着工され、石材を本丸に運ぶための搬入路が稲荷曲輪・人質曲輪・本丸の石垣を除去して敷設された。そして、大正 11 年（1922）9 月に高さ 30m の花崗岩による謝恩塔が本丸南西隅に竣工された。

## ウ 昭和期

大正 15 年（1926）年の山梨県議会において、山梨県庁舎と山梨県議会議事堂を甲府中学校跡地（昭和 3 年（1928）移転）にあたる楽屋曲輪内に移転することが議決され、昭和 2 年（1927）に起工、昭和 5 年（1930）3 月に竣工した。なお、山梨県庁舎建設に伴い、月見櫓台を含む二の丸南西側の石垣も解体されている。この山梨県庁舎建設工事に前後して、昭和 2 年（1927）から同 4 年（1929）にかけて、楽屋曲輪の西側から南側の石垣が解体され、それに面する内堀も埋め立てられ、その一部は民間に払い下げられた。

この後、内城における大規模な開発はしばらく陰を潜めるが、中央線や身延線の敷地確保をはじめ、戦後の住宅地拡大などにより、徐々にではあるが、屋形曲輪・花畑がほぼ消失し、数寄屋曲輪東側の内堀も埋め立てられた。そして昭和 30 年（1955）に追手門東側の内堀跡地に山梨県民会館が建設されると、内堀がさらに埋め立てられ、ほぼ現在も残る甲府城跡の範囲となった。

また、舞鶴城公園としてわずかに残された内城の部分においても、最大の特徴である石垣は、コンクリート積みや間地積みへと改変を受け、本来の姿から大きく変化した。また、山梨県立青少年科学センターを初めとする諸施設や、記念碑の建立も歴史景観の変貌に大きな影響を与えてきた。

本来の姿から大きく変わる甲府城に対して保護すべく甲府城跡総合学術調査団が昭和 42 年（1967）に発足し、調査が開始され、昭和 43 年（1968）12 月に市街地化を免れた 5.2ha が県指定史跡甲府城跡として告示され、昭和 44 年には甲府城の価値や調査成果を大成した甲府城総合調査報告書が刊行された。

## エ 平成期

平成 2 年（1990）より山梨県土木部による舞鶴城公園整備事業が着手され、平成 16 年（2004）までに石垣改修や公園便益施設の設置、さらに稲荷櫓ほか 3 門が復元整備された。平成 19 年（2007）には甲府市により甲府市歴史公園山手御門として清水曲輪跡地が整備され、山手御門が復元された。

平成 17 年（2005）から平成 21 年度（2009）にかけて、山梨県教育委員会は甲府城跡保存活用等検討委員会を設置し、天守閣復元の可能性や本丸を中心とした歴史的建造物に関する広範囲な調査検討をおこなった。その成果を踏まえ、復元の検討が可能な櫓門 2 棟（鉄門・銅門）について、復元整備の可能性や方向性等を検討する甲府城跡櫓門

整備検討委員会を平成 21 年 (2009) に設置し、平成 22 年 (2010) から平成 25 年 (2013) にかけて実施した甲府城跡櫓門整備事業により本丸に鉄門が復元整備された。

また、甲府城に石材を供給した愛宕山石切場は、平成 21 年 (2009) 11 月 12 日に「甲府城跡愛宕山石切場跡」として県史跡に指定された。

平成 26 年 (2014) 5 月 19 日、山梨県考古学協会と山梨郷土研究会の連名により、「県指定甲府城跡の国指定史跡にむけて」とする要望書が山梨県知事と山梨県教育委員会教育長に提出された。それを受け、山梨県では平成 30 年 (2019) 7 月 31 日に国史跡指定の意見を具申し、同年 10 月 19 日、文部科学大臣が文化審議会に史跡指定を諮問、同年 11 月 16 日、文化審議会が文部科学大臣に史跡指定を答申、平成 31 年 (2019) 2 月 26 日、官報に史跡指定が告示された。また、令和 2 年 (2020) 3 月 10 日、山梨県が管理団体に指定された。

表 甲府城歴史年表（築城前史～廃城まで）

平安時代末期			甲斐源氏武田信義の子、一条忠頼が一条小山に館を造営
元暦	元年	(1184)	一条忠頼が謀殺
			忠頼死後、一条忠頼未亡人が出家して尼となり、館を尼寺に改める
正和	元年	(1312)	一条時信が尼寺を時宗の道場として、一蓮寺を創建
鎌倉・室町期			一蓮寺が繁栄し、周辺には門前町が展開した
永正	16年	(1519)	武田信虎が本拠を川田から躑躅ヶ崎に移す
大永	4年	(1524)	一条小山砦普請を開始
	6年	(1526)	一蓮寺を小山原に移す これ以降、一条小山は武田城下町の南側防衛の拠点として重視
天正	9年	(1581)	武田勝頼が本拠を躑躅ヶ崎から新府へ移す
	10年	(1582)	織田信長らにより武田氏滅び、信長の支配となる（城代：河尻秀隆） 本能寺の変の後、徳川家康が甲斐国を支配（城代：平岩親吉）
	18年	(1590)	豊臣秀吉、家康を関東へ移封
			秀吉、羽柴秀勝を配置 このころ甲府城築城が開始された
19年	(1591)	秀吉、加藤光泰を配置	
文禄	2年	(1593)	光泰、文禄の役に出兵し病没
			秀吉、浅野長政・幸長親子を配置
慶長	5年	(1600)	関ヶ原の戦い後、浅野氏が紀伊和歌山へ移封
			家康の支配となる（城代：平岩親吉）
			このころ甲府城が完成したと考えられる
8年	(1603)	徳川義直（家康九男）、甲府城主となる	
12年	(1607)	義直、尾張へ転封し、甲府城番制（武川十二騎）となる	
元和	2年	(1616)	徳川忠長（家光の弟）が甲府城主となる
寛永	10年	(1633)	忠長、謀反の疑いで高崎で切腹
			甲府城番制（第二次）となる
寛文	元年	(1661)	徳川綱重（家光の三男）が甲府藩主となる
	4年	(1664)	綱重、甲府城大修理を実施
延宝	元年	(1673)	綱重の子、綱豊が甲府藩主となる
宝永	元年	(1704)	綱豊が六代将軍家宣となる 柳沢吉保、甲府藩主となり、大修理を実施
	6年	(1709)	吉保が隠居し、子の吉里が甲府藩主となる
享保	9年	(1724)	吉里、大和郡山へ移封し、甲府勤番支配が始まる
	12年	(1727)	甲府大火で城内、城外に甚大な被害
慶応	2年	(1866)	勤番制を廃止して、城代を置く
	4年	(1868)	板垣退助率いる官軍が甲府城開城
明治	元年	(1968)	明治維新
	4年	(1971)	山梨県が成立
	3年	(1972)	甲府城が陸軍省の管轄下に入る
	6年	(1873)	政府、甲府城を廃城とする



表 近世甲斐国の支配体制の変遷一覧

時代区分	甲斐国主・藩主・甲府城代等		時代（開始年）		備考
織豊期	織田信長	甲斐：河尻秀隆	天正10年	(1582)	穴山梅雪の本領（河内領）を除く
	徳川家康	甲斐：平岩親吉	天正10年	(1582)	穴山勝千代の本領（河内領）を除く
	羽柴秀勝	—	天正18年	(1590)	都留郡に三輪近家を配備
	加藤光泰	—	天正19年	(1591)	都留郡に加藤光吉を配備。石高21万石（推定）
	浅野長政	—	文禄2年	(1593)	都留郡に浅野氏重（良重）を配備し、勝山城を築城（2万石）。石高21万石（長政5万石、幸長16万石）。後に太閤検地の結果により、22万5000石となる。なお長政は豊臣秀吉の奉行として上方に在駐していたため、幸長が甲斐国主として入国
	浅野幸長	—			
江戸時代	徳川家康	城代：平岩親吉	慶長5年	(1600)	都留郡に鳥居元忠を配備
	藩主：徳川義直	城代：平岩親吉	慶長8年	(1603)	25万石、都留郡に鳥居成次を配備
	幕府直轄	城番：武川十二騎	慶長12年	(1607)	第一次甲府城番制。都留郡は鳥居成次
	藩主：徳川忠長	城番：武川十二騎	元和2年	(1616)	元和4年説もあり。石高50万石（うち甲斐は18万石）。都留郡の鳥居成次が忠長家老となる（寛永9年に改易）
	幕府直轄	城番：伊丹康勝	寛永9年	(1632)	徳美藩主。都留郡には秋元康朝が配備される（寛永10年、1万8000石で入封）
		城番：幕府旗本	寛永13年	(1636)	第二次甲府城番制。上級旗本2名が1年交代で城番を勤める。都留郡は秋元氏
	藩主：徳川綱重	城代：渡辺綱治、戸田周防守ら	寛文元年	(1661)	25万石（甲斐は14万5000石余）。都留郡は秋元氏（宝永元年武蔵国川越に転封）
	藩主：徳川綱豊		延宝7年	(1679)	
	藩主：柳沢吉保	—	宝永元年	(1704)	22万8765石余（甲斐三郡15万1288石余、内高7万7477石余）
	藩主：柳沢吉里	—	宝永7年	(1710)	
	幕府直轄	甲府勤番支配	享保9年	(1724)	上級旗本2名を追手支配、山手支配にそれぞれ任命。役高3000石、役知1000石。江戸城芙蓉之間詰、席次は遠国奉行の上席
		甲府城代	慶応2年	(1866)	駿府城代と同格。役金2000両

## (2) 甲府城の構造

### 1) 縄張りとお曲輪

甲府城は、独立丘陵一条小山を主体として築かれた織豊系城郭であり、立地による分類では平山城として知られている。天守台を最頂部とする階層式城郭であり、縄張りは地形に沿って平場を造り出し、曲輪を形成している。主な曲輪は天守台、本丸、人質曲輪、天守曲輪、帯曲輪、二の丸、稲荷曲輪、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪が、現在も残っている。現在は消失してしまった曲輪として、大半が山梨県庁となっている楽屋曲輪、開発によって市街地化している屋形曲輪、清水曲輪、花畑が挙げられる。上記の曲輪（内城）を取り囲む形で内堀が展開しているが、大半が消失しており、鍛冶曲輪と接する南側のみその姿を残している。内城の周囲には内郭である武家地が展開し、その外周を二の堀が囲んでいる。さらにその外側に外郭として町人地と、外郭を囲む三の堀が展開している。

甲府城の建造物の多くは、享保 12 年（1727）の大火で焼失しており、近代初期の段階で江戸時代の建造物は全て失われている。

以下、主要な曲輪について詳細を記す。

#### ① 天守台

内城の最上段に位置している。いわゆる穴蔵構造であり、柳沢時代には本丸と繋がる天守穴蔵門が入口に設置され、天守台を取り巻く土塀が絵図に描かれている。築城期の石垣が良好に残存しており、初期の織豊系城郭における野面積みの特徴が随所に確認できる。

#### ② 本丸

内城の中央に位置している。鉄門と銅門の二つの櫓門から、天守曲輪と帯曲輪にそれぞれ繋がっている。曲輪の北東部に本丸櫓が存在するほか、江戸時代中期の柳沢期に本丸書院、毘沙門堂などの建物が建設されている。毘沙門堂は、柳沢氏の大和郡山転封後、華光院（甲府市）に移築され現存しているが、本丸書院及び銅門は享保 12 年（1727）の大火で焼失している。

また、本丸の各所で岩盤が高い位置で確認されており、発掘調査により石切場が確認されたほか、北西部では石垣の裏側の地中石垣が確認されている。

なお、本丸の南西部に大正 11 年（1922）に建設された謝恩碑の石材搬入路確保のため、本丸櫓台の石垣は解体され、本来は繋がっていなかった人質曲輪が園路となっている。

#### ③ 人質曲輪

内城の中でも最も狭い曲輪である。柳沢時代には人質曲輪門で天守曲輪と繋がっており、南に天守台・西に本丸櫓の土台の石垣によって袋小路になっていた。

大正 11 年（1922）に本丸に建設された謝恩碑の石材搬入路確保のため、曲輪西側の石垣は解体された。

#### ④ 天守曲輪

本丸の東側から南側の外周部に展開し、本丸、人質曲輪、二の丸、稲荷曲輪と繋がっている。天守曲輪門と中ノ門が存在し、柳沢時代には武具土蔵があった。

#### ⑤ 帯曲輪

本丸を西から南にかけてとりまく帯曲輪であり、銅門と鉄門に隣接する。絵図では建

物は確認出来ないが、発掘調査で内松陰門から銅門へ繋ぐ経路上に、柵門と考えられる柱穴を確認している。

## ⑥ 二の丸

帯曲輪の西側に位置している。曲輪中央部付近に東西方向の石垣で南北に区画され、江戸期の絵図では、北側を山ノ井曲輪、南側を台所曲輪と表記するものもある。

北側の山ノ井曲輪側は、山の井門により帯曲輪と、内松蔭門・外松蔭門を介し屋形曲輪に繋がっている。また、銅門を介して本丸に繋がっていた。天守閣が無い時代、大手門の正面に位置していたのが月見櫓であり、この櫓が天守閣を代用していたものと考えられる。また、江戸時代初期の絵図にはコの字状の建物が描かれるものもある。月見櫓は享保12年（1727）の大火で焼失している。

南側の台所曲輪側には台所門、坂下門を介し天守曲輪、鍛冶曲輪と繋がっているが、目立った建物などは確認できない。

外松蔭門や月見櫓台を含む台所曲輪西側の石垣は、昭和初期以降消失し、現在は山梨県庁および主要地方道甲府山梨線（舞鶴通り）となっている。

## ⑦ 稲荷曲輪

本丸の北側に位置し、数寄屋勝手門、稲荷曲輪門、梅林門、竹林門を介して、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪、屋形曲輪、清水曲輪と繋がっている。築城期から江戸時代初期の絵図には稲荷櫓南から曲輪北東側の石垣上に多門櫓が描かれているが、寛文4年（1664）以降、多門櫓は描かれていない。江戸時代中期の柳沢期以降、煙硝蔵、土蔵、番所、庄城稲荷社などの様々な建物が配されるほか、楽只堂年録には曲輪西部に曲輪を東西に仕切る柵列が描かれている。

曲輪西側は明治30年代の鉄道建設等により消失、また、稲荷櫓南側の石垣は大正11年（1922）に本丸に建設された謝恩碑の石材搬入路確保のために一部解体され、現在では、舞鶴城公園の出入り口となっている。

## ⑧ 数寄屋曲輪

稲荷曲輪の南側に位置し、数寄屋勝手門を介し稲荷曲輪と、数寄屋表門を介し鍛冶曲輪とそれぞれ繋がっている。寛文4年（1664）以降、南端部に三重の数寄屋櫓が、江戸時代中期柳沢期以降、北東部に番所が設置されるほか、北西部における発掘調査により石切場が確認されている。稲荷曲輪から数寄屋曲輪にかけて甲府城の東端には、築城期の石垣が良好に残存している。

## ⑨ 鍛冶曲輪

内城の南東部に位置し、坂下門を介し二の丸と、稲荷曲輪門を介し稲荷曲輪と、数寄屋表門を介し数寄屋曲輪と、鍛冶曲輪門を介し楽屋曲輪とそれぞれ繋がっている。また、鍛冶曲輪門の東側には食違石垣が設置されているほか、曲輪北東部には、石切場が存在する。曲輪内の建物については、寛文4年（1664）以降、米蔵・味噌蔵・番所が、江戸時代後期には勘定所（会所）が設置されている。

## ⑩ 清水曲輪

内城の北西部、屋形曲輪の北側に位置し、竹林門を介し稲荷曲輪と、屋形曲輪門を介し屋形曲輪と、中仕切門を介し楽屋曲輪と繋がっている。

北西側には山手門が配され、曲輪へ繋がり、甲府城の3つの出入口の内、山手門虎口

が設けられている。江戸時代初期絵図では山手門には櫓門のみが描かれ、内堀を渡る橋も土橋となっている。山手門虎口では、城内へは土橋を渡り突き当たったところで柳門虎口と同様に右手に矩手に折れ、櫓門を通過する構造となっている。寛文4年(1664)前後の絵図では、櫓門東側の石垣上の遠見番所が描かれる。寛文4年(1664)以降の絵図では櫓門の前面に高麗門が描かれるほか、内堀を掘削して木橋が設置され、木橋と高麗門の間に食違石垣が描かれるようになる。江戸時代中期の柳沢期以降の絵図、遠見番所・食違石垣は撤去される。『楽只堂年録』には、「山之手門 元ハ水之手門」と書かれており、柳沢時代から「山手門」と呼ばれている。甲府勤番士によって書かれた『裏見寒話』には、大手門と山手門が勤番の通行御門となっていることが書かれている。曲輪内の建物・構造物は、築城期から江戸時代初期までは清水櫓のほか、清水曲輪書院等の建物が描かれる。寛文4年(1664)以降、清水曲輪書院等の建物は減少し、江戸時代中期の柳沢期には、射場・的場・馬場が描かれている。享保12年(1727)の大火により清水曲輪書院等の建物は焼失し、江戸後期には清水櫓と番所、米倉、会所が描かれるのみとなる。このことから清水曲輪が重要視されていた時期は江戸初期であったことが推察される。

現状では JR 中央線や甲府駅などの市街地化により、当時の面影は失われている。

#### ⑩ 屋形曲輪

稲荷曲輪の北西側に位置し、曲輪の東・北・西側外周を内堀が巡る。内堀西側には土橋が配され、屋形曲輪門を介し清水曲輪と繋がっている。また、曲輪南西部では梅林門を介し稲荷曲輪と、外松蔭門を介し二の丸と、屋形門を介し楽屋曲輪門とそれぞれ繋がっている。江戸時代中期以降には内堀北側に木橋が描かれ、清水曲輪と繋がることとなる。番所、金蔵のほか、築城期から江戸時代前期では長屋が絵図上に描かれるが、江戸時代中期の柳沢期には藩主の居館である屋形曲輪書院が描かれており、重要な曲輪の一つとなっていた。

現在では、デパート、ホテル、甲府駅、主要地方道甲府山梨線(舞鶴通り)など、様々な形で開発を受けて市街地化しており、当時の面影は見られない。

#### ⑪ 楽屋曲輪

内城の南西部に位置し、鍛冶曲輪門を介し鍛冶曲輪と、屋形門を介し屋形曲輪と、中仕切門を介し清水曲輪とそれぞれ繋がっている。また、曲輪南東部には大手門、北西部には柳門がそれぞれ配され内郭と繋がり、甲府城の3つの出入口の内、大手門虎口、柳門虎口が設けられている。

江戸時代初期絵図では大手門・柳門ともに櫓門のみが描かれ、内堀を渡る橋も土橋となっている。大手門虎口では、城内へは土橋を渡り突き当たったところで左手に矩手に折れ、柳門虎口では、右手に矩手に折れ、櫓門を通過する構造となっている。土橋の前には大手門、柳門ともに「下馬」と書かれていることから、通常の出入口として使用していたと思われる。寛文4年(1664)以降の絵図では櫓門の前面に高麗門が描かれるほか、内堀を掘削して木橋が設置され、木橋と高麗門の間に食違石垣が見られる。木橋の前には初期絵図と同様に柳門とともに「下馬」と書かれている。これらは徳川綱重による寛文の大修理によるものと考えられ、楽屋曲輪においては他に、曲輪西側の内堀沿いの土坡が石垣に変更されている。江戸時代中期の柳沢期以降の絵図

には、食違石垣は見られなくなる。『楽只堂年録』には、「追手門 元ハ南追手」、「柳門 元ハ西追手」と書かれており、柳沢時代から「追手門」、「柳門」と呼ばれている。『裏見寒話』には、大手門と山手門が勤番の通行御門となっていることが書かれていることから、柳門は、通常通行がなかったと考えられる。

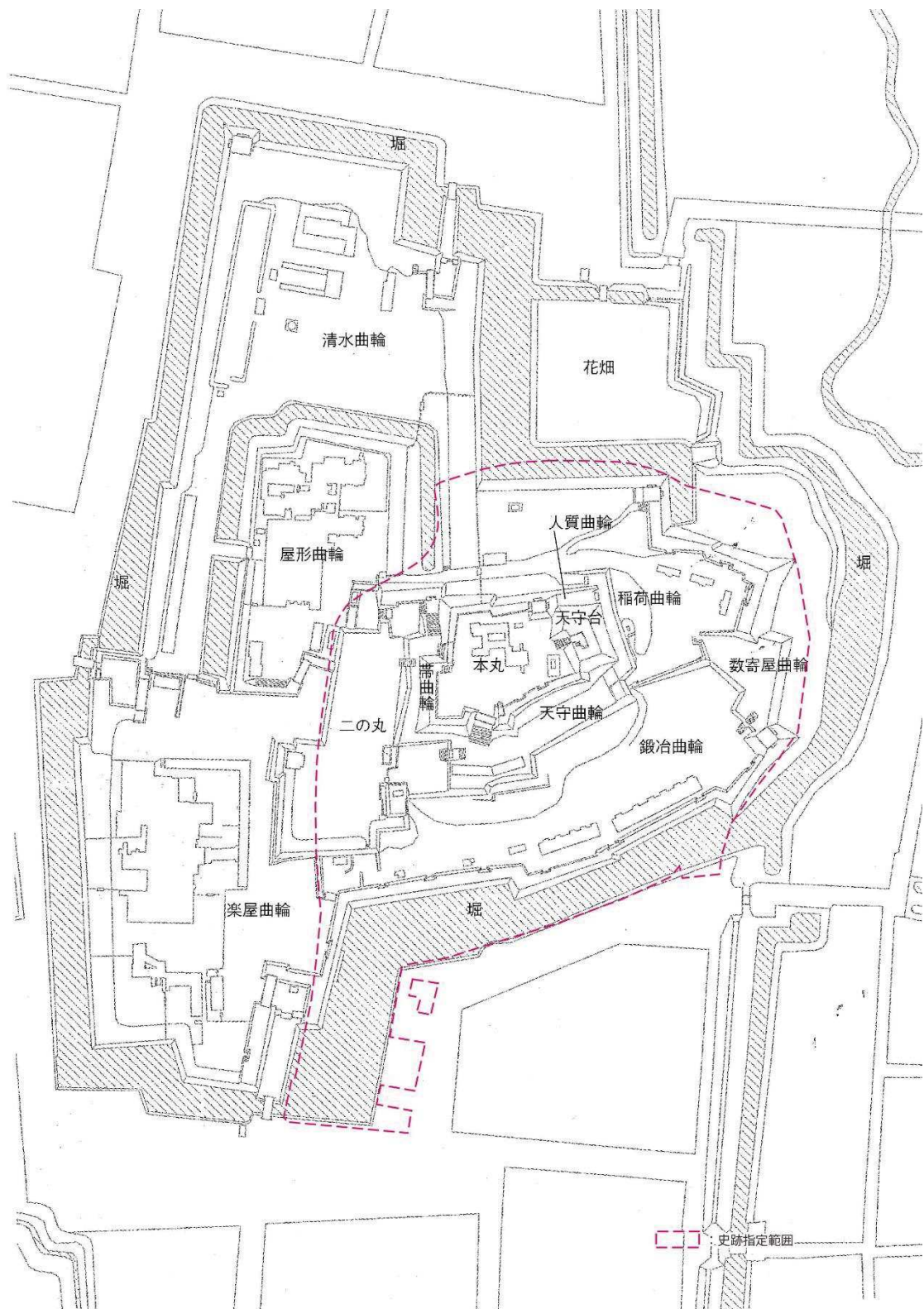
曲輪内の建物・構造物は、築城期から江戸時代前期までは番所のほか、長屋や長屋に連なる区画石垣、温泉が存在するが、江戸時代中期の柳沢期の絵図では、楽屋曲輪書院や能舞台、金蔵などが見られ、当時の政庁の中心地となっている。なお、江戸時代後期の絵図では楽屋曲輪書院や能舞台は見られなくなり、勤番所が描かれている。

現在は曲輪の大半が山梨県庁の敷地内となるなど市街地化が進み、当時の面影は失われている。

## ⑫ 花畑（曲輪）

内城の北西部、稲荷曲輪から内堀を挟んで北側に位置する。北・西・南側外周部は内堀に面し、東側は愛宕町口見附から南に連なる土塁で区画されている。江戸時代中期の柳沢期に増設された曲輪であり、曲輪北部に長屋門や番所等の建物が配される。柳沢氏の大和郡山転封後の絵図には建物等は一切描かれなくなる。

明治30年代以降、中央本線の敷設に伴う市街地化が進み、当時の面影は失われている。



甲府城の曲輪配置

## 2) 石垣

### ① 石垣の概要について

甲府城跡の石垣は、その積み方の特徴から築城期に構築された石垣の残存度がきわめて高く、野面積み石垣としては東日本有数の事例と言える。今日現在残っている石垣や、いくつかの歴史史料から江戸時代の修理状況は把握できるものの他城郭と比較しても極めて少量といえる。

恐らく、江戸時代を通じて幕府直轄であったことが主な理由と想像できるが、むしろ野面積みがこれほど贅沢に残ったという事実は、現在の甲府城跡最大の文化財的価値に繋がっている。

現在の甲府城跡は、天守台・本丸といった城郭の中核部分を中心に約6haが残るのみである。この範囲に残る石垣をみると、圧倒的に野面積みの石垣が多い。天守台を筆頭に本丸、天守曲輪、人質曲輪、稻荷曲輪、数寄屋曲輪、二の丸、鍛冶曲輪の各所で10m級の野面積み石垣が多くみられ、甲府城が野面積みという石積技術の導入を得て築城されたことを証明している。

その他に、二の丸南東部・本丸北西部と、天守曲輪の北東隅で2種類の石垣を見ることができる。つまり、現在の甲府城跡内では3種類の積み方の違う石垣を見ることができる。この3種類の違いは時代差と考えられる。そして、時代差とは技術差であり、石の配し方、石材の加工の程度、石垣の勾配、隅角部の様子、目地（石同士の継ぎ目）、詰石など多くの点が要素としてあげられる。石垣を外観で観察する場合の重要な観察項目であり、これらをもとに歴史経過とあわせ、城内個々の石垣をみると次のようになる。

#### ア 築城期の石垣

築城期の石垣は、浅野氏が慶長5年までに完成させた野面積み石垣を指す。しかし、時間設定では若干の時間幅を持たせたい。

理由は、慶長5年に浅野氏が完成させた直後、関ヶ原の戦いを経て、浅野氏は和歌山へ移封となっている。代わって徳川家康の重臣平岩親吉が城代として甲府城へ入ってくる。この背景を踏まえて城内の発掘調査成果と石垣をみしてみると、稲荷曲輪東の石垣では現状の野面積み石垣の内側から、同じく野面積みの石垣が発見されている。

つまり、同じ野面積みで、一度積んだ石垣のうえにさらに積み直しを実施したことが確認されたのである。また、現在の武徳殿が建つ二の丸西側の野面積み石垣では、一度は隅角部として積まれたが、この部分を埋め殺し石垣を延長させている。同様な事例は稲荷曲輪と数寄屋曲輪の南側接続部分で今日も見ることができる。

これらの現象は、同じ野面積み石垣の段階で、曲輪の形状変更や縄張り変更が実施されたと推定することができ、浅野氏が石垣を積みながら変更していった可能性もあるが、その直後の平岩氏に変更させた可能性も捨てきれない。したがって、築城期の野面積み石垣といった場合、その築造のほぼすべて浅野氏によるものであるが、平岩氏の関与を考えると、やや幅広の時間設定が必要といえる。

補足であるが、『甲斐国志』には平岩氏が慶長6年2月に「上州ヲ転ジテ甲州ニ移リ新タニ府之城ヲ築キテ」との記載がある。具体的な作業内容には触れていなが、興味深い記録である。

次に、築城期の石垣の技術的な特徴をみってみる。内部構造物の中心には、盛土と呼ばれる砂質土などを突き固めた人工的な背面構造がある。場所によっては、自然岩盤などであったりもする。この盛土と石垣石材の間には平均一間程度の幅で裏栗石とよばれる5～30cm程度の石が隙間なく入れられている。基本的には石垣石材・裏栗石・盛土の三位一体が整って石垣は存在しているといえる。そして、石垣はいわば壁のようなものであり、内部構造物に寄りかかる擁壁と考えたい。

この寄りかかった傾斜を勾配と呼んでいる。織豊期以前の石垣も当然勾配を持つが、研究史によると直線的であることが多いとの指摘がある。

しかし、織豊期の石垣は、その勾配に一工夫ある。甲府城跡の石垣では、下部付近の勾配（初期勾配）は平均角度で65°内外である。しかし、上部に向かって勾配は徐々にきつくなり、石垣上部では70°を越える。その結果、外観はきれいなアーチ状の弧を描く姿になる。実際には最初から曲線で弧を描いているわけではなく、いくつかの直線を繋ぐときに少しずつ角度をつけるもので、地球は丸いが水平線は直線に見えるのと同じ理屈である。このような勾配の付け方はいくつかの方法があり、同じ甲府城内でも地形や形状により上手に変化させているようである。いずれにせよ、その目的は石垣を高く、大きく積んでいくために必要な石垣自体の強度をだすためと考えられる。

石の使い方は、場所によっていくつかのタイプに分かれるが、野面石（自然石）か、矢穴などで粗割りした程度の石材をほとんど使っている。積む際には、前後左右の石としっかりかみ合わせ安定感を取り、表面で見える目地（石と石の隙間）には詰石を入れ、石尻と呼ばれる内部側は飼石などと呼ばれる小型の石でやはりしっかりと安定させている。これも、石垣を高く、頑丈に積むための当時の技術といえる。

また、堀など地盤が弱い地点では、玉石を敷き詰めた上に杉や松などの丸太を並べ、不等沈下を防ぐ胴木と呼ばれる施設も考え出されている。

このような石積技術は、先に述べたとおり古代から日本にあったわけではなく、お城づくりで高石垣を積み上げる必要性が生じて開花した土木技術である。このような技術で甲府城築城期の石垣は積まれたのである。

代表的なものとして二の丸西面石垣（N-44）や稲荷曲輪南東石垣（I-40）では、築城期野面積み石垣に野面積み石垣が積み足されているほか、稲荷曲輪東側石垣（I-74、76）等のように、築城期野面積み石垣の前面に野面積み石垣が築造され、結果的に二重構造となった石垣がある。

## イ 江戸時代初期の石垣

江戸初期の石垣は実像として掴み切れていない部分がある。しかし、石垣の積み方の様相で、他の城郭と比較してみると様相が類似することもあり、江戸初期という時間設定は甲府城の石垣を考えるうえで必要と考えている。

先述したとおり、この時期の石垣の実像が不明なので、古文書で江戸初期の石垣の時間軸を設定してみる。1点目は、保坂吾良吉氏が論じた『宇津谷村の職人集団』掲載の史料である。史料は寛文3年（1663）に書かれた「石切人数書上ヶ帳」で、内容は15人の石工職人名を列記したうえで「以慶安年中御城御普請之節御用相勤候」と過去実績を明記している。



「石切」とは一般的に石工職人を指し、慶安年間（1648～52）は第二次甲府城番制の時期であり、御城を甲府城とすれば、彼ら宇津谷の石工職人が集団で御普請に関わりを持った根拠といえる。ただし、城内のどの部分の石工事に関わったかは今のところ不明である。これを便宜的に「慶安の石垣」と呼ぶ。

2点目は、寛文4年（1664）前後に集中する2つの史料である。1つは、やはり保坂氏が取り上げた史料で、前年の寛文3年（1663）に書かれた前掲と同じ「石切人数書上ヶ帳」である。ここでも、15人の石工職人名を挙げている。しかし、あくまで名前を書き上げた帳面であり、実施・実績はわからない。

もう1つは国立公文書館内閣文庫蔵の『甲府日記』が根拠で、寛文4年に幕府より2万両を得て改修の実施を記録するものである。これは改修の着手日が明確であることから、実施されたといえるが、規模・内容の詳細は今のところ不明である。ただ、2万両の事業と考えると、建物だけではなく土台の石垣にも手を加えていることを想像するのに無理はないと思え、15名の宇津谷石工職人の石積み工事への従事は十分に理解できるのではないか。これを便宜的に「寛文の石垣」と呼ぶ。

3つめは、元禄8年（1695）9月から10月にかけて「甲府御城石垣破損付」で始まる幕府間とのやり取りの記録である。出典は、内閣文庫の『諸事書留』である。内容は石垣修復の計画絵図を持参し幕府側土屋相模守と交渉した記録である。しかし、計画の絵図面も現在のところ未確認で、実施については不明である。これを便宜的に「元禄の石垣」と呼ぶ。

やや長くなったが、実態はともかく「慶安の石垣」「寛文の石垣」「元禄の石垣」が江戸前半のなかで文献・絵図を軸に考えられる石垣である。

では、最初に基軸になるであろう「寛文の石垣」から、根拠となる絵図を提示しながら考えてみたい。注視すべきは楽屋曲輪西側の堀と曲輪の境界部（現在の山梨県庁南西部付近）の描写である。

寛文年間以前に描かれたと考えられる「幸長公甲州府中城図」（『甲府城総合調査報告書』山梨県教育委員会、昭和44年刊）や「極秘諸国城図」（『江戸・関東の城下町』平凡社、平成10年刊）のでは、この境界部は土塁として描かれている。

これに対し、甲州文庫（山梨県立博物館）や『楽只堂年録』（柳沢文庫蔵）など寛文年間以降、取り分け1700年代初頭の柳沢時代から描かれた絵図では石垣が描かれている。

つまり、寛文年間の境としてみられる城郭構造表現の差から、この地点の石垣は寛文年間の境として積まれたとの仮定が可能となる。

もう1つ、古写真を提示したい。『ふるさとの思い出写真集甲府』（昭和53年、国書刊行会刊）に掲載されているもので、明治45年東宮殿下行啓時に、偶然にも「寛文の石垣」の地点を現在の主要地方道甲府葎崎線（平和通り）から山梨県庁方面を撮影した写真である。他に、大正8年9月撮影の記録もあるが、古写真から見て取れる石垣の外観は、横目地が直線的にとおり、個々の石材の形状はほぼ整い精加工が想定できる、急勾配の石垣である。このタイプの積み方は、仙台城や若松城など各地の寛永年間以降の城郭石垣に見られるものであることも踏まえ、「寛文の石垣」と設定することができる。

また、この時期は甲府宰相徳川綱重（3代将軍家光の3男）の時代である。支配は、引き続き城代が執り行ったが、稲荷櫓に代表される建物増改築も実施され、宰相格に相応しい大がかりな事業が2万両の経費の中で実施されたといえる。

次に、残った「慶安の石垣」と「元禄の石垣」について考えてみる。現在城内に残る野面積みを除いた江戸期の石垣は二の丸南東部・本丸北西部と、天守曲輪の北東隅である。

二の丸の石垣は、築城期には野面積みとして積まれたが、その後積み直された石材利用状況から判断できる。本丸の石垣は平成の改修工事で積み直しをしているが、古写真などから旧状を推定することができる。両者に共通することは明らかに野面積みではないこと。個々の石材は中程度の加工がなされ、石同士の目地は狭く、詰石も小型少量化している。相対的な比較をすると築城期の野面積みより進んだ段階であり、加工状況や積み方の細やかさから推測すると「寛文の石垣」よりは古いと位置付けられる。

慶安年間は、第二次甲府城番制時代であり、支配体制からも大がかりな改修工事よりは、むしろ部分的な修復というニュアンスが強い。このことから、二の丸南東部・本丸北西部の石垣は「慶安の石垣」の可能性が高いといえる。

最後に残る「元禄の石垣」は、『諸事書留』にある石垣の破損に伴う幕府重臣とのやり取りから計画性が極めて高いと言えるが、現在では実施の根拠となる情報を持ち得ない。ただ、より江戸中・後期の石垣との検証は必要であるが、大手門（現在の山梨県庁南東側・防災新館東交差点付近）などを写した古写真には、上述した石垣とはまた異なるタイプの石垣が見える。この点については、次項で詳細に検討したい。

代表的なものとして銅門西面石垣（H-26）、天守曲輪北面・東面石垣（Tn-1、2）は、いずれも加工石材を布積みにした石垣であり、隅角部は隅脇石を伴う算木積みで、江戸切りが採用されている。矢穴の幅は7cm程度と、築城期の約12cmと比べて幅狭であり、築城以降の江戸期に改修されたものと考えられる。天守曲輪北面・東面石垣については『楽只堂年録』所収の絵図に「石垣孕み出し候」の記載がみられる。また、当該石垣は大正年間に本丸に設置された謝恩碑の部材等を搬入される際に一部が解体されたとの伝承がある。

上記の石垣はいずれも平成2年以降の舞鶴城公園整備事業の中で解体を伴う修理が実施されている。

なお、鍛冶曲輪や中の門周辺には幅約7cmの矢穴列が残っており、岩盤の規模から常時とは考え難いが築城以降にも石材が採取されていたものと推測される。ただし、これらが石垣改修に伴う痕跡であるかは不明である。

『県指定史跡甲府城跡 甲府城跡保存活用等調査検討委員会報告書』では、近世の石垣改修について、文献等の記載を基に、①寛文3年の「石切人数書上ヶ帳」に記載された慶安年間の御普請で実施された可能性のある改修、②寛文4年に幕府から2万両を得て実施した改修、③元禄8年の「甲府御城石垣破損付」の記載から実施された可能性のある改修、④『楽只堂年録』に記載された内容から柳沢期に実施された可能性のある改修等、撤去や新たな築造を含む石垣の改修履歴を想定している。各石垣の改修時期に

については、石垣構築技術の年代観と文献からの断片的な情報を頼りに検討せざるを得ない状況であり、今後検討を重ねる必要がある。

### ウ 江戸中・後期の石垣

1704年（宝永元年）から約20年間柳沢氏が唯一の大名として甲斐国を支配している。短期間ではあるが、この時期を江戸中期と呼称し、柳沢氏の大和郡山移封以降の甲府勤番時代から幕末までを江戸後期と区分しておく。

江戸中期の石垣関連の記録は、特に柳沢文庫（大和郡山市）に残っている。その中でも、1705年（宝永2年）に描かれた『楽只堂年録』の絵図は城内の石垣の撤去・改修を具体的に示し、幕府へその許可を求めているものである。江戸期を通じてどの城郭でも「武家諸法度」に従い、小さな改修であっても幕府に届けて許可をもらう制度になっている。甲府城の場合、この絵図のように改修箇所が克明に記されているのは現在のところ柳沢文庫の史料に限られ大変貴重である。

さて、この絵図で城内の積み直し工事を要望しているのは、天守曲輪北西部の隅角部付近とその西側延長にある石垣の2箇所である。天守曲輪北西部の石垣は、大正14年の謝恩碑建設の際、一部取り壊されており、完全な姿で残ってはいない。しかし、改修工事に伴う調査で、部分的にその積み方の特徴を良く残していることがわかった。

石垣はほとんど目地の隙間がなく積みれ、個々の石材の加工は江戸初期の石垣と比較しても精緻であり、現在の間知積みに近い。一般的には「切込み剥ぎ」と呼ばれる積み方で、城内に残る石垣の中でも極めて特徴的である。この石垣を、柳沢氏の支配した江戸中期という時代観で捉えることは、江戸城や駿府城などの全国的事例からも合致しているといえる。

江戸後期の石垣については、実のところよくわからない。支配体制では、幕府直轄地で甲府勤番支配の時期であり、藩主もいないことから石垣の改修というような大規模工事は実施せず、どちらかといえば補修やメンテナンスで石垣を維持したのではないかと考えている。伝聞ではあるが安政の大地震で城内南側の堀の一部が崩壊し、これを修復したというが、残念ながら近代化の中で間知積みにされ、その姿を知ることはできない。

### エ 近代に改修された石垣

近代以降、平成初期の舞鶴城公園整備事業以前に修理された石垣には、次のものがある。

坂下門南側石垣から二の丸南面石垣の一部にかけて（N-35～38）は、明治5年頃に甲府の石工大久保善治郎によって改修されたことが判明している。いずれも加工石材を布積みにした石垣であるが、特にN-35石垣は乱積みで鑑遣いの石材配置がみられるなど、甲府城築城期の野面積み石垣を模したものと思われる。隅角部を構成する石材は控えが短く、明確な算木積みとならない。また江戸切りが採用されている。二の丸西面石垣（N-44）の上部は昭和30年代に改修されている。

その他、古写真や舞鶴城公園整備事業時に撮影された改修前の石垣の写真、石垣の観察所見から、次の石垣が近代に改修されていたことが伺える。二の丸北面石垣（N-1）、天守曲輪南東面石垣（Tn-2～5）、鍛冶曲輪南面石垣（K-30）、二の丸南面石垣の上部（N-

37～38)等。これらの石垣は舞鶴城公園整備事業に伴い改修されており、それ以前の改修時の姿は現在留めていない。

## ② 石積みの特徴について

### ア 石垣の勾配

城内石垣の平均勾配は 66.6 度を測り、緩やかな勾配のグループは 55～60 度、きつい勾配のグループは 72～84 度を測る。ただし、きつい勾配のグループは石垣の高さが 5m 以下という条件が付されるという傾向がある。

城内の石垣勾配については、おおよそ次の 3 種類に分類される。

- ①根石から高さ  $1/3$ ～ $1/2$  までは直線的で、天端まで法を返していく
- ②根石から天端までの間で、一定間隔で法を返していく
- ③ほぼ直線か、変化が認めにくい

①は、天守台等で見られ城内では多い傾向にある事例といえる。なかでも天守台東南隅角部は高さ 13m のうち約  $1/2$  まで直線勾配で、以降 2 ヶ所で法を返す勾配を構成している。一方、その真西 20m に位置する本丸東南隅角部は高さ 9m のうち根石から  $1/3$  強までは直線勾配で、以降天端に向かい 3 ヶ所で法を返す状況である。詳細な測量図なしに言及することは危険であるが、少なくとも前者は直線勾配の石垣に、後者は緩やかな弧を描く勾配に遠望できる。両者は極めて近い隣接関係にあるにもかかわらず、勾配のあり方に変化が認められる。

②は、稲荷曲輪の稲荷櫓台石垣に認められる勾配である。根石からおおよそ等しい間隔で勾配が返されている。

③は、天端高さの低い石垣にみられる傾向にある。また、本丸南西部周辺の石垣（謝恩碑周辺）に直線的な傾向にある石垣が認められるが、微細な変化であるため石垣変位変形による影響が排除できないため詳細については不明である。

### イ 隅角部

隅角部の構造や石材の利用方法は、広く指摘があるようにその石垣の時代性や技術性をもっとも端的に表れる部位とされる。

また、いくつかの歴史史料からも隅角部石材の石材や積み方（強度）に細心の注意を向けていたことが分かることから、仕上がりの結果としては意識・技術レベルの水準が反映されているといえる。

甲府城跡の隅角部を観察するといくつかの要素が抽出できる。

（積み方 [算木積み]）

- ①天守台周辺の隅角部では  $1/3$ ～ $1/2$  以内の数量で算木積みが認められる。
- ②数寄屋櫓台、稲荷櫓台の隅角部では  $1/2$  以上の比率で算木積みが認められる。
- ③数寄屋櫓台に連続する石垣の隅角部では、ほとんど算木積みが認められない。

現状では、石垣構築当時に算木積みまたはそれに類する技術が現場側で意識されていたことはほぼ間違いないと言える。しかし、その手法や効能までが現場の技術として浸透しきっていたか否かは不明であり、この点が明瞭な算木積みを見出せない理由や技術的時代背景に係わっている可能性がある。

また、算木積みであっても配石の方法が粗雑で一点荷重により維持している事例が複数存在する。これは石垣の経年変化を勘案する必要もあるが、これに起因する破損事

例も稲荷櫓台石垣改修工事では多く発見されている。

### ウ 石材加工

隅角部の表面加工については次の傾向が伺える。

- ①加工せずに、自然石の角部を使用
- ②加工せずに、自然の割れ面を使用
- ③矢穴で分割した石材を使用
- ④自然分割した石材をノミ加工または粗割で整形した石材を使用

この場合、①②は自然な稜線になるが、据わりが悪くなる傾向がある。恐らく稜線を直線的に通すため石尻がやや不安定に据えられることに原因があるといえる。③は特に稲荷櫓台石垣で24石中8石が矢穴で割られた石材を使用するという強い傾向が調査で確認され、築石部と比較すると極めて高い使用比率といえる。④の加工は玄能等によるハツリとノミによる痕跡の2種類が認められる。特に前者は隅角部の稜線を作り出す場合に多く認められる。後者は面の整形（瘤の除却等）に用いられるような痕跡が多く、面全面にノミ加工が入るような事例はほとんどない。

また、築石部石材の加工は城内各所で認められるが、必ずしも全石材に施されている訳ではなく、ハツリは石材縁辺部分の整形（石材を割ったときに生じるステップ状の高まり）やおそらく瘤状の凸部の除去におこなわれたものであろう。

いずれにしても、隅角部と築石部ともに石材への加工は必要最低限の作業と考えられ、江戸時代中頃には一般的となるスタレ状の表面加工および化粧性のある加工はほとんど確認されない。

### エ 矢穴

矢穴は、石材形状や硬度、節理面の有無により穿たれる個数は異なるが、計画線に沿って一定間隔で鑿を用いて掘られ、矢によって破断させる。

甲府城跡の場合、築城期に位置付けられる野面積み石垣に長さ11～15cm、幅5～7cm、深さ8～11cmの通称「四寸矢穴」が掘られており、定量化の傾向にある。

また、江戸期に構築された城内石垣にも矢穴は認められるが、その形状は長さから通称「三寸矢穴」と呼ばれ長さ6～8センチ、幅4～6センチ、深さ5～7センチと小形化する傾向にある。この差は時代差と甲府城では捉えることができる。

### オ 石材の配石

城内の築石部では、基本的には石材を横長に使用する傾向がある。その間隙に比較的面は小さいが控え長の長い石材が投入され、規模の大きな詰石が入る配石が一般的である。

これとは対照的に、石材を縦長に使ういわゆる「鏡石」も各所に確認できる。その顕著な事例が本丸南に位置する鉄門の石垣である。門の側壁にあたる両側には城内でも最大規模の石材を縦横に配石し特異な石垣となっている。全国的な事例も報告されているが、やはり正面性や象徴的な場所に縦使いの配石がおこなわれているという傾向では一致すると思われる。

ただし、縦使いの配石が必ずしも全て同じ意味を持つ訳ではなく、横長配石主体の築石部でも単発で縦使いの石材が配石される事例も各所である。一般的に、石材を縦長に使用するのはいは好ましい技術とはいえないが、城内で観察できるこのような事例は城郭

等の石積技術史のなかでも古相に位置付けられるものではないだろうか。

## カ 石質

城内で確認できる石垣石材はほぼ両輝石安山岩である。これは甲府城の立地と周辺地盤が安山岩であるという地質的特徴と一致し、また石切場に残る石材とも合致する。このことから、甲府城の石垣石材は、後述する甲府城内と城外に存在する石切場が供給源であると言える。

### 3) 堀

堀は防衛上の機能だけでなく、内城と武家屋敷、町人地を区画する役割を担っていた。また、水路と接続することで排水にも関わっていたと考えられる。甲府城下町は、内城を武家地と町人地が同心円状に取り囲む構造となっており、内城と武家地の間を内堀が、武家地と町人地の間を二の堀が区画し、さらに三の堀が町人地を囲んでいる。

堀は明治時代以降の市街地開発等により大きく埋め立てられた他、改修によって幅が減じられたり、石積みがコンクリート擁壁に改められたりしているものの、特に二の堀や三の堀は、開渠や暗渠によってその姿を留めている個所が多い。また、埋め立てられたことにより現地に保存されていることが判明した事例もあり、後述するように発掘調査によって位置や規模、構造の一端が明らかとなった事例がある。

#### ①内堀

近世に制作された絵図の中には北側を空堀、南側を水堀として表現されたものがある。これは、甲府城が扇状地上に立地し、北から南にかけて傾斜していることによるものと推測される。現在は鍛冶曲輪に面した内城南側の一部を残して他は埋め立てられており、地下に保存されている。

江戸時代中期に成立した「楽只堂年録」所収の絵図には東側の堀の中に堀を横切る石積みが描かれている。機能は明らかでないが、先述のように甲府城が南に傾斜する扇状地上に立地することから、水位調整を目的とした構造物の可能性はある。堀の中には他にも構造物があった可能性があるが、これまでの発掘調査ではこういった遺構は発見されていない。

#### ②二の堀

現在、二の堀西側から南側にかけては一級河川濁川として、その他の部分は水路として残っている。南西に位置する地点では、発掘調査により二の堀跡と土塁跡が発見されている。また青沼町口東側に隣接する二の堀内側での発掘調査では、暗渠による二の堀への排水や集水升を通して二の堀に排水していたと推測される水路が発見されている。これは城下町における排水と二の堀の関係を知る貴重な遺構として、現地に埋設保存した。

#### ③三の堀

武家地北側の町人地を囲む三の堀と、武家地南東側の町人地を囲む三の堀とに分かれている。現在、武家地南東側の町人地を囲む三の堀は南側が一級河川濁川として残っている。その他の部分は水路となるかもしくは大部分が埋め立てられているが、現在の町割りに名残が残っている個所もある。武家地北側の町人地を囲む三の堀も、一部が水路として残っている。

武家地南東側町人地を囲む三の堀の内、南東隅の辺りからは東に濁川流路と接続しており、一帯は深町河岸として船着き場が置かれ、富士川を上って濁川に入った舟がこの地

で荷を下ろした。なお、当河岸は昭和3年の身延線開通の頃まで利用されていた。

#### 4) 愛宕山石切場

愛宕山石切場は甲府城の北東部に位置する愛宕山の山裾に立地する。江戸時代以降、この地域が「愛宕町」と称されていたことから「愛宕町石取場」と呼ばれている。当地は「石取場」「御用石場」といった標記も見られる。甲府城に柳沢が入城する以前の町名が見られる『諸国居城図』（寛文四～宝永二年（1664～1705）財団法人前前田育徳会所蔵）には、すでに「石取場」の表記が見られることから、享保期以前から当地で石材採取が行われていたことを推測することができる。

石工の歴史を概観すると、甲府城に関わったであろうと推定される人物に、慶長11年（1606）、浅野幸長（この時点で紀州藩主）の家臣で、武田の遺臣である矢島長雲（甲州人の記録あり）がいる。將軍の命を受けた浅野幸長は矢島長雲に命じて虎ノ門に堰を設けさせ、赤坂御門に至る溜池を作った。川除等の普請技術を有する有能な人材が、武田家滅亡後に再任用されて活躍していたことがわかる。近世城郭を造営するに当たり、豊臣系技術者集団の指導の下、高い土木技術を有した在地系技術者集団とともに対応したことを理解することができる。なお、在地の技術者集団については『宇津谷村石切人数書上帳』（寛文3年（1663）『甲斐市小林正博家文書』）に15人の在地系石工職人の名が記されており、その存在が知られる。

また、正徳6年（1716）には愛宕町の名主七兵衛らが高遠の石切職人の在留届を、享保3年（1718）「愛宕町石切宿」六兵衛らが在留届を提出している。さらに『愛宕町絵図』（享保改『甲州文庫』山梨県立博物館蔵）には、石取場のほか町屋敷や石切道の三念（年）坂が描かれており、この地に在留して活躍した高遠石工をはじめとして、継続的な石取に利用されていたことを伺うことができる。在地の職人とともに、出稼ぎの高遠石工の活躍が見えてくる。こういった出稼ぎ行為の姿は、大工や瓦職人にもみられる。

当該地点が石切場である点については、次の江戸期の文献史料3点と絵図1点、現地に立地する大正年間の石碑1点が根拠資料としてあげられる。

##### 1) 『甲斐国志』巻之五十五 神社部第一 山八幡の項

文化11年（1814）に甲府勤番支配の松平定能が編纂した『甲斐国志』には、山八幡は戦国武田時代には八日町にあったが、文禄年間に浅野氏甲府城築城にともない、社地が石山であるため現在の甲府市東光寺一丁目に移転したことを記述している。

「(中略) 躑躅ガ崎ニ館アリシ頃ハ今ノ八日町此ノ辺リニ在リテ八日市場ト称ス文禄中浅野氏当城ヲ築カルル時社寺ハ悉ク石山ナル故ニ今ノ地ニ遷シ岩石ヲ切取りテ本城ノ壘トセラル因リテ石取場ト呼ベリ」

なお、八日町（八日市場）の所在は不明であるが、現在の愛宕町周辺と考えられる。

##### 2) 『御用留帳』（大木家文書）

市内横近習にあった鐘撞堂を宝永五年（1708）に愛宕町の石取場へ移という記載がある。

##### 3) 『御用日記』（坂田家文書）

明和七年（1770）に市内元紺屋町から出火し、愛宕町の四寺院を焼いたが、石取場で止まったという記載がある。

##### 4) 『諸国居城図』『甲府城下』（尊敬閣文庫蔵絵図）

『諸国居城図』は、加賀藩軍学者有沢永定が17世紀後半から18世紀初頭（元禄年間頃）に編纂した絵図集である。「甲府城下」の愛宕山部分に石取場という記載がみられる。

#### 5) 石碑銘文（『園記』碑）

大正11年に建立され、現在も当該地に残る石碑の銘文（全256字）に文禄2年（1593）に国主浅野長政が府中城（甲府城）を築き、その時付近の社地の岩石を採った遺跡であることが書かれている。

「(中略) 文禄二年国主浅野長政築府中城也堀鑿近傍社地之于岩石而當山莊者即其遺跡也 (中略)」

近代になると製糸場を営む甲府市八日町66番地の大木善右衛門の別宅「愛宕山荘」として利用されるが、明治38年3月に創設された歩兵49連隊（甲府連隊）の連隊長公舎として、昭和13年頃まで使用され、大木善一郎に返還される。その後、甲府地方裁判所所長宿舎となるが平成15年に移転した。

その後、土地を管理する財務省甲府財務事務所より建物撤去についての事前協議があり、平成19年（2007）に埋蔵文化財の確認調査を実施した。その結果、2箇所を設定したトレンチでは、池からの湧水が見られたが、多量の安山岩の割殻が確認されたことにより石切場の痕跡が明らかになった。庭園内に露出する安山岩には加工痕のある石材11石が、また23箇所の矢穴を確認した。矢は幅が概ね約二寸（5～6cm）の規格で、江戸期（寛文～宝永年間）のものと考えられるが、これは甲府城銅門付近に認められるものと同じ規格である。また最大約8cmのものが確認されている。これらは敷地東側の池周辺で多く確認されており、池の北側の巨大な岩石には6箇所に及ぶ矢穴が認められ、池そのものが石取場の跡であったことが理解できる。なお、これ以外にも大正期以降と考えられる削岩機等の痕跡やセリ矢の矢穴のある石材も確認され、江戸時代以降も継続的に採石されていたことが窺われる。

城内の石切場はよく知られているところであるが、愛宕山一帯には本地とは別に残石の分布や石取の跡が数カ所確認されている。また同じ岩脈の広がる武田の杜のある山宮町一帯にも残石の分布が認められ、石取の歴史は痕跡として把握することができるが、継続して採石されているため最終的な姿であることから、初期の歴史を追うことが困難であるという課題がある。

#### 5) 甲府城下町

城下町は、甲府盆地北部に発達した相川扇状地の扇端部に位置する。戦国期に武田氏の城下であった武田城下町を組込み、比高30mの一条小山に築かれた甲府城を中心に形成され、東西1.7km、南北2.5kmの範囲に広がる。

町場としての起源は、鎌倉時代に一条小山にあった一蓮寺の門前町にまで求め得る。戦国期、武田氏は一蓮寺門前町周辺に八日市場・三日市場を設置するほか、長禅寺宿・善光寺門前町・長延寺（現光沢寺）寺内町など城下南端を市町が集中する商業地区として位置づけていた。天正9年（1581）、新府城（韮崎市）への移転及び翌年3月の武田氏滅亡に際し、城下の荒廃を伝える資料は見出せず、町場は存続し続けたものと推量される。

武田氏滅亡後に建設された近世都市「甲府城下町」は、国主の住まいと政庁を兼ねた甲府城を中心に、内郭の武家地、外郭の町人地が同心円状に広がる。さらにその外縁を取り囲むように多くの寺社が配置され、飛躍的に拡大した都市規模を有するとともに、



国主を頂点とする身分制度が城下町の構造に反映された新しい都市空間へと移り変わった。また、内郭を土塁と二の堀、外郭を土塁と三の堀により区画し、城防衛の最前線とする「総構え」の手法も武田氏時代にはみられなかったものである。

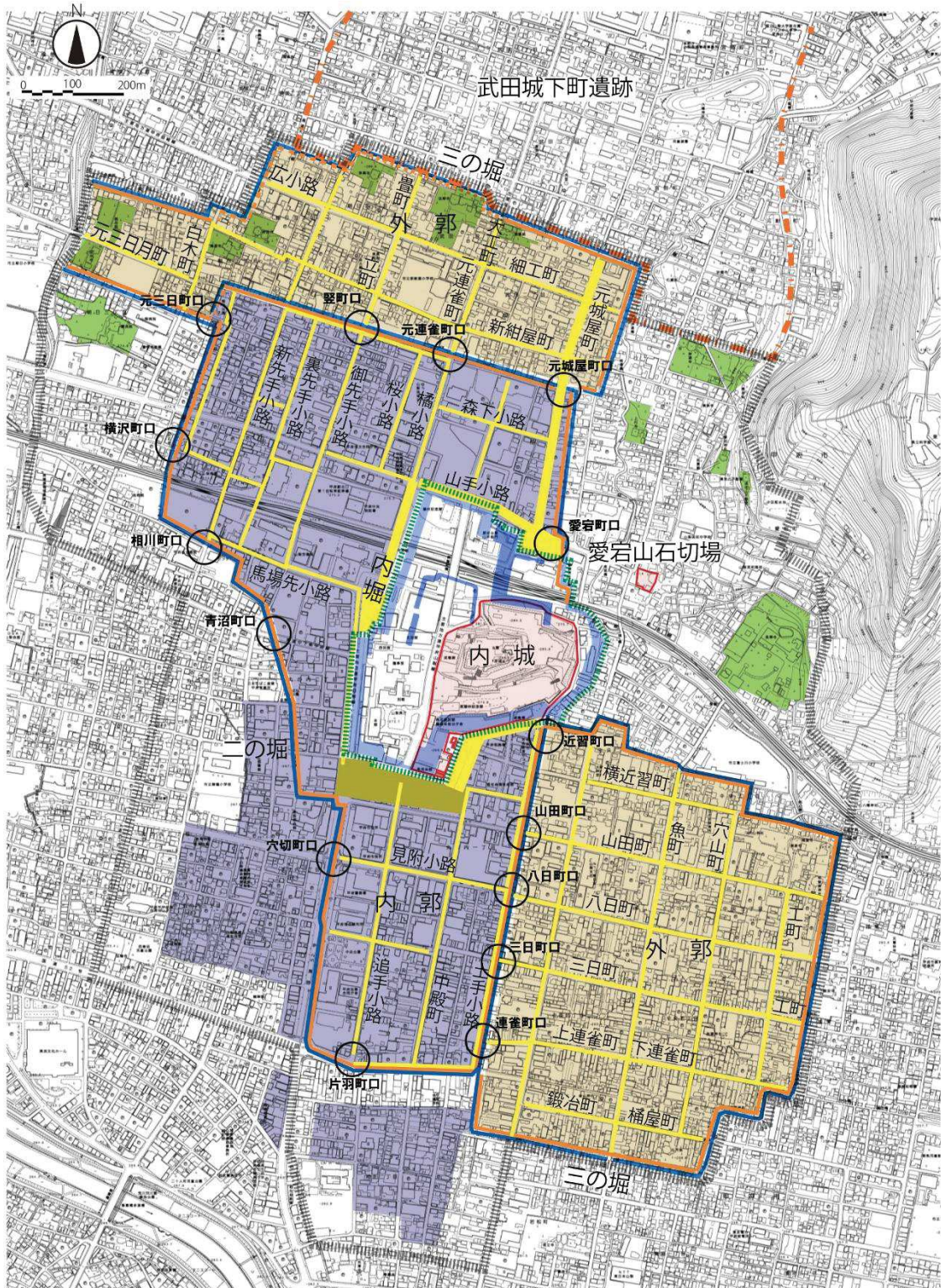
内郭の武家地は、追手（大手）小路・橘小路・先手小路などを機軸とした長方形の街区が設けられ、外縁部は城門を配した15の見附けにより外郭へと通じる。

外郭の町人地は南北二つに分かれ、北側一帯の上府中（古府中）は武田氏時代の町人地の大部分を取り込み、南北5筋・東西3筋の街路により形づくられた長形状の街区に中世の名残をとどめている。一方新たに建設された南側の下府中（新府中）は、南北4筋・東西6筋の街路により碁盤目状に整然と区画されている。また、往来の盛んな甲州道中が通過する下府中には、武田氏時代の有力商人居住地であった柳町・連雀町・三日町・八日町が移転され、最も賑わう中心街となる。

城下町外縁に配置された寺社の多くは、城下町建設に伴って移転・創建された由緒をもち、今なお江戸期以来の地に位置し、法灯を伝えている。『甲斐国志』は築城・城下建設にともない多数の寺社の移転を伝えるが、「文禄中」、もしくは「文禄中、浅野氏の時」とする伝承が多い。城郭や城下は浅野長政・幸長父子により整えられたと考えられるが、寺社の移転を慶長年中や元和年中とする伝承もあるため、慶長5年（1600）、徳川家康領有後もなお城下の整備は続いたと推定される。

宝永元年（1704）、柳沢吉保・吉里の甲斐領有により多数の家臣団が移住した城下は大きな賑わいをみせることとなる。町名変更のほか、家臣屋敷の配置にともなう内郭整備、郭外への新たな武家地新設など城下町の拡大・再整備が実施された。江戸期を通じ柳沢氏領有期に最も拡大・整備された城下は、享保9年（1724）、同氏の大和郡山移封により、空屋敷の払い下げなど武家地整理が進められた。同12年（1727）の大火により旧観を失い、以後、幕末にいたるまで城下規模・形態に変化なく明治維新を向かえることとなる。

明治6年（1873）には内郭諸門の撤廃、同8年（1875）は二の堀埋め立てにより旧武家地の市街地化が進められ、かつての堀・土塁はわずかに水路や土地区画にその名残をとどめることとなった。甲府城下町は近世をつうじ甲斐国の政治・経済・文化の中心を占める都市であり、今なお、中心都市としてその位置づけは現代に至っても変化ない。



- 史跡指定範囲
- 武家地
- 堀
- 見附
- 街路
- 周知の埋蔵文化財包蔵地甲府城跡
- 計画対象地
- 町人地
- 土塁
- 寺社
- 周知の埋蔵文化財包蔵地甲府城下町遺跡
- 周知の埋蔵文化財包蔵地武田城下町遺跡

甲府城下町の空間構成（再掲）

## 6) 甲府城に関連する文化財

甲府城や甲府城に関わった人物にまつわる文化財は、現在も県内各地に残されている。

まず建造物として、甲府市指定文化財である華光院毘沙門堂は、元は柳沢吉保が甲府城本丸に設置したもので、その後、柳沢吉里の大和郡山移封に伴い華光院へ移したと伝えられる。甲府城内に所在した建造物は多くが幕末に取り壊されているため、現在のところ現存する数少ない建造物の一つである。また、同じく甲府市指定の大泉寺総門は、柳沢吉保が創建した菩提寺である永慶寺の総門を移築したものと伝えられる。永慶寺は柳沢吉保によって甲府市岩窪町に建てられたが、吉里とともに大和郡山へ移ったため、現在は所在しない寺院である。一方、慶長院（甲府市朝日三丁目）にある冠木門は詳細不詳であるが、城内建築との伝承を有している。木戸門の形式を示し、見附施設の撤去に際し移築されたと推定されている。

絵画は、柳沢吉保像が県指定文化財として一蓮寺（甲府市）と常光寺（韮崎市）にそれぞれ保存されている。いずれも狩野常信の筆によるもので、自身が賛を加えている。また指定文化財ではないが、柳沢吉里が描いた「絹本着色信玄像図」が恵林寺（甲州市）に所蔵されている。

彫刻は、浅野長政により善光寺（甲府市）へ移された、元千塚村（甲府市）光増寺所蔵の木造阿弥陀如来及両脇侍像と元宮地村（韮崎市）大仏堂所蔵の木造阿弥陀如来及両脇侍像が、重要文化財として指定されている。また、「木造柳沢吉保座像附寿蔵安置納状一通」と工芸品「短刀備州長船倫光応安二年八月日」及び「太刀銘来国長附糸巻太刀拵」は柳沢吉保が菩提寺である恵林寺（甲州市）へ自ら納めたものである。前者は甲州市指定文化財に、後者の工芸品2点は国重要文化財にそれぞれ指定されている。

書跡は、甲府城及び甲府城下町に係る記録、甲府城の築城に関わった加藤光泰、浅野長政等人物に関連する文書等関連記録類が県指定文化財を中心に指定される。

歴史資料は、右左口の商人が特権の根拠として保存していた徳川家康御朱印や羽柴秀勝御朱印、及びそれらを保管していた石櫃等一括資料である「右左口区有文書及関連資料一括」、柳沢吉保と正室定子夫妻が永慶寺へ寄進し、永慶寺が大和郡山移封後に恵林寺（甲州市）へ寄進した道具や経典類一式「柳沢吉保・定子関係資料一括」等が県指定文化財となっている。

考古資料は平成2年度から16年度まで行われた「舞鶴城公園整備事業」に伴う発掘調査で出土した金箔鯨瓦や飾瓦、遺物が県指定文化財となっている。金箔鯨瓦は、甲府城築城期のものと比定される金箔付の鯨瓦120点であり、その多くが本丸周辺を中心に出土している。飾瓦は、表面に金箔や朱が施された甲府城築城期の風神を模した鬼瓦や、豊臣家の桐紋や浅野家の違い鷹の羽紋、江戸時代中期の柳沢家の花四菱等の家紋付き瓦など151点がある。遺物は、寛文年間に稲荷櫓台に地鎮具として埋納された輪宝や、江戸時代中期柳沢期に比定される花四菱の家紋を用いた銅製の釘隠、狭間の部材である木製品等の甲府城建築物の造営等に関わる資料32点である。

史跡は善光寺（甲府市）に所在する加藤光泰の墓が甲府市指定史跡に、恵林寺（甲州市）に所在する柳沢吉保夫妻の墓が甲州市指定文化財になっている。また国史跡武田氏館跡は甲府城築造までは甲斐国の拠点であった。

その他、文化財指定はないが、宝永7年（1710）在銘の伝甲府城追手橋擬宝珠（山梨県

立甲府第一高等学校・山梨県立考古博物館蔵)、伝塩硝蔵壺(考古博物館)、伝甲府城内道具入箱(山梨県立博物館蔵)、清水御米蔵米盆・米板(山梨中銀金融資料館)などが各機関に伝わっている。一方、県指定文化財である山梨県庁舎別館(旧本館)および県議会議事堂は、楽屋曲輪跡地に昭和5年(1930)に山梨県庁舎として建築された。内装も当時の姿を良好に留めている庁舎建築の好例である。

以上で述べた以外にも、山梨県内には多くの甲府城や甲府城主に関連する文化財が存在しており、甲府城や山梨県の歴史を理解するために重要な役割を果たしている。



華光院毘沙門堂(甲府市指定)



慶長院冠木門



伝甲府城大手橋擬宝珠(後2点:  
甲府第一高等学校・前1点:山  
梨県立考古博物館所蔵)



擬宝珠に刻まれた銘文



伝煙硝蔵壺(山梨県立考古博物  
館所蔵)



金箔鯨瓦



飾瓦



飾瓦



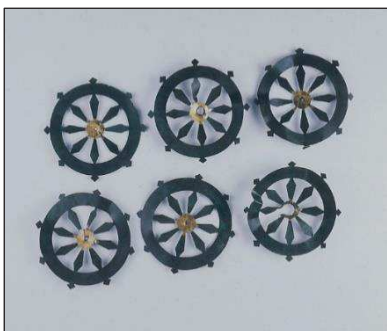
飾瓦



飾瓦



飾瓦



輪宝



狭間



釘隠

甲府城または甲府城主に関わる山梨県内所在の指定文化財

※いずれも山梨県指定文化財 山梨県立考古博物館所蔵

表 甲府城および甲府城主に関わる県内所在の指定文化財

種別	名称	員数	所在地	所有者・管理者	概要	指定	指定年月日
建造物	山梨県庁舎別館（旧本館）及び県議会議事堂	2棟	甲府市丸の内1丁目6-1	山梨県	甲府城内に昭和初期に建築された山梨県庁舎。公共建築物として数少ない好例。	県	平成21年12月24日
	大泉寺総門	1棟	甲府市古府中町5015	大泉寺	柳沢吉保が菩提寺として創建した永慶寺の門を移築したと伝える。	市	平成5年9月1日
	華光院毘沙門堂	1棟	甲府市元紺屋町33	華光院	柳沢吉保が本丸に設置。柳沢吉里の大和郡山移封に伴い華光院に移築したと伝えられる。	市	平成27年3月31日
	華光院宮殿	1棟	甲府市元紺屋町33	華光院	享保8年、柳沢吉里が作成させた厨子。	市	平成27年3月31日
絵画	絹本着色柳沢吉保像（自賛） 狩野常信筆	1幅	甲府市太田町5-16	一蓮寺	柳沢吉保が狩野常信に描かせた自らの画像3幅対の一つで自ら賛を加えている。	県	平成9年12月15日
	絹本着色柳沢吉保像（自賛） 狩野常信筆・紙本墨摺勒修作福念仏図説 附奉納目録・香奠目録并包紙	2幅3紙	韭崎市青哲町青木	常光寺	柳沢吉保が狩野常信に描かせた自らの画像3幅対の一つで自ら賛を加えている。	県	平成9年12月15日
彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍像	3躯	甲府市善光寺3丁目36	善光寺	光増寺旧蔵のものを浅野長政が善光寺に移したと伝えられる。	国	明治39年9月6日
	木造阿弥陀如来及両脇侍像	3躯	甲府市善光寺3丁目36	善光寺	元宮地村大仏堂旧蔵のものを浅野長政が善光寺に移したと伝えられる。	国	明治39年9月6日
	木造柳沢吉保坐像 附 寿像安置納状一通	1躯	甲州市塩山小屋敷	恵林寺	柳沢吉保が恵林寺に奉納。	市	昭和58年9月5日
工芸品	短刀 備州長船倫光 応安二年八月日	1口	甲州市塩山小屋敷	恵林寺	柳沢吉保が恵林寺に奉納。	国	大正4年3月26日
	太刀 銘 来国長 附糸巻太刀拵	1口	甲州市塩山小屋敷	恵林寺	柳沢吉保が恵林寺に奉納。	国	大正4年3月26日
書跡	坂田家文書	258冊、10通	甲府市大和町7-1	個人	甲府城下町府中検断町年寄役に関わる文書の他、徳川家の印書などがある。	県	昭和33年6月19日
	慈照寺文書	16通	甲斐市竜王	慈照寺	武田氏・織田氏・徳川氏に関する文書。	県	昭和44年11月20日
	大善寺文書	72通	甲州市勝沼町勝沼	大善寺	武田氏・織田氏・豊臣氏・徳川氏などからの寄進状などがある。	県	昭和44年11月20日
	向嶽寺文書	53点	甲州市塩山上於曾	向嶽寺	加藤光泰によるが加えられた向嶽寺領絵図などがある。	県	昭和48年7月12日
	大泉寺文書	20点	甲府市古府中町	大泉寺	武田家・浅野家・豊臣家等からの判状などがある。	県	昭和55年9月18日
	広蔵院文書	36点	笛吹市一宮町金沢	広蔵院	加藤光泰の文書などがある。	県	昭和56年3月12日
	一蓮寺過去帳	3冊	太田町5-16	一蓮寺	一条小山に創建された一蓮寺に伝わる過去帳。甲府城下の都市住人の実態を伝えている。	県	昭和58年12月26日
歴史資料	旧巨摩郡北山筋山中十二箇村共有文書・箱・袱紗 2点	文書25点、箱5点、袱紗2点	甲斐市島上条	旧北山筋十二箇村古文書保存委員会（甲斐市教育委員会）	加藤光泰黒印状や浅野長政黒印状などがある。	県	平成12年3月2日
	右左口区有文書及び関連資料一括	2526点	甲府市右左口町	宿区	徳川家康朱印状や羽柴秀勝朱印状等の文書がある。	県	平成14年7月4日
考古資料	柳澤吉保・定子関係資料一括	111点	甲州市塩山小屋敷	恵林寺	柳沢吉保と正室定子夫妻が永慶寺へ寄進した道具・経典類等。柳沢氏の太和郡山移封に伴い恵林寺に寄進。	県	平成19年4月26日
	甲府城跡出土金箔鯨瓦	120点	甲府市下曾根町923	山梨県	発掘調査により出土した金箔鯨瓦	県	平成21年5月21日
考古資料	甲府城跡出土飾瓦	151点	甲府市下曾根町923	山梨県	発掘調査により出土した金箔飾瓦	県	平成22年3月31日
	甲府城跡出土遺物	32点	甲府市下曾根町923	山梨県	発掘調査により出土した石製品・金属製品・木製品。	県	平成23年9月1日
史跡	武田氏館跡		古府中町・大手3丁目・及び屋形3丁目	甲府市	甲斐武田氏三代の居城である。甲府城築造まで徳川家康や加藤光泰により改修を受けつつ甲斐国の拠点城郭であった。	国	昭和13年5月30日
	甲府城跡		甲府市丸の内一丁目、中央三丁目、愛宕町字愛宕町	山梨県	内城および愛宕山石切場。	国	平成31年2月26日
	加藤光泰の墓		甲府市善光寺三丁目36-1	善光寺	加藤光泰の墓。	市	昭和62年3月31日
	柳沢吉保夫妻の墓		甲州市塩山小屋敷	恵林寺	柳沢吉保夫妻の墓。柳沢氏の太和郡山移封に伴い、菩提寺永慶寺より恵林寺に改葬。	市	昭和62年12月12日

※市町村指定文化財は代表的なもののみを記載

## 7) 文献

甲府城に関する文献資料については、これまで「甲府市史」・「山梨県史」・「甲府城総合調査報告書」のほか、甲府城に関わる各種調査報告書などで研究の蓄積がある。このうち、一般的に購入または閲覧できる書籍に所収されているものを主として、甲府城の普請や作事、破損に関する内容が含まれる主な文献資料を以下の表に示す。

表 甲府城に関する主な文献資料一覧

資料名	文献名	概要	所蔵	時期	年月日
徳川家康書状	森川勘一郎氏旧蔵書	徳川家康、平岩親吉に一条小山の普請を命じる。		築城期	天正十七年カ（一五八九）一月二十七日
徳川家奉公人連署状写	土屋家文書	徳川家康の奉行が八幡神社神主に府中御城普請の触れだしを命じる。	東大史料編纂所（影写本）	築城期	天正十七年カ（一五八九）四月二十五日
羽柴秀勝印判状写	桶屋町弥五右衛門旧蔵文書「甲斐国志卷之百一」『甲州文庫』	羽柴秀勝、築城従事の桶大工に対し伝馬役の免除	山梨県立博物館	築城期	天正十八年（一五九〇）八月三日
加藤光泰書状	大洲加藤文書	文禄の役出兵中の光泰より甲府城普請に関する指令	東大史料編纂所（影写本）	築城期	文禄二年（一五九三）一月カ
浅野長継判物写	市部村八幡神社文書『社記』巻之五	築城従事の杣人に対し年貢の一部免除	山梨県立図書館	築城期	文禄三年（一五九四）四月二十六日
浅野長吉証文写	西保北村持主惣百姓『甲州古文書』別五	浅野長政、鍛冶衆に年貢の一部免除か築城御用を申しつける。	国立公文書館内閣文庫	築城期	文禄三年（一五九四）十二月二十八日
浅野家印判状写	若尾資料「古文書雑集」六	浅野長政、築城従事の桶大工に対し伝馬役の免除	山梨県立博物館	築城期	文禄三年（一五九四）十二月二十八日
平岩親吉諸役免許状写	山梨県誌本「古文書」二	城普請に関連し、量職人の諸役を免除		城番・城代期	慶長十一年（一六〇六）二月七日
宇津谷村石切人数書上帳	小林正博家文書	宇津谷村名主らより城普請に関連した村内石切職人の調書。	個人	綱重・綱豊期	寛文三年（一六六三）
甲府日記		寛文の大修理の記録等。	国立公文書館内閣文庫	綱重・綱豊期	寛文四年～十二年（一六六四～一六七二）
元禄三年三役人数名前書上ヶ帳	小林正博家文書	宇津谷村名主らより城普請に関連した村内石切職人の調書。	個人	綱重・綱豊期	元禄三年（一六九〇）
諸事書留		石垣修復のため幕府へ絵図を提出。	国立公文書館	綱重・綱豊期	元禄八年（一六九五）
楽只堂年録		宝永の大修理の記録等。	（公財）郡山城史跡・柳沢文庫保存会	柳沢期	宝永二～四年（一七〇五～七）
甲斐国府中城修復願書絵図		洪水被害をうけた城内の修復のために幕府に絵図を提出。	（公財）郡山城史跡・柳沢文庫保存会	柳沢期	正徳三年（一七一三）
甲府勤番日記	甲府勤番別所文書	城内建物の修繕・取り壊し等を記録した甲府勤番期の資料。	江戸東京博物館	甲府勤番期	享保九年～安永九年（一七二四～一七八〇）
城内稲荷社焼失につき窺	旧福昌院文書	甲府城内の稲荷社焼失に関する資料。		甲府勤番期	明和七年（一七七七）
宇津谷村百姓の灰石商売の儀御尋につき書上帳	小林正博家文書	城普請に関連した宇津谷村名主らからの石灰の商売に関する調書。	個人	甲府勤番期	安永八年（一七七九）六月
修復関連文書一		下山村からの城内修復に関する調書。	個人	甲府勤番期	安永八年（一七七九）九月
天明六年御用留	頼生文庫	城内の作事・普請等に関する資料。	山梨県立博物館	甲府勤番期	天明六年（一七八六）
天明七年御用留	頼生文庫	城内の普請・修復に関する資料。	山梨県立博物館	甲府勤番期	天明七年（一七八七）
文化四年御用日記	坂田家文書	太鼓櫓等の城内の修復に関する資料。	個人	甲府勤番期	文化四年（一八〇七）
甲府城修復御用材山出し往來に付心得廻状	広瀬七良家文書	城内外修復のための用材に関する資料。		甲府勤番期	文政十二年（一八二九）
天保六年御用日記	坂田家文書	櫓・塀等の修復や石垣普請に関する記録。	個人	甲府勤番期	天保六年（一八三五）
天保七年御用日記	坂田家文書	湯村煙硝蔵の城内移築等に関する資料。	個人	甲府勤番期	天保七年（一八三六）

天保八年御用日記	坂田家文書	楽屋御殿の建具・張付のなどの入札・追手門番所の門交換等に関する資料。	個人	甲府勤番期	天保八年（一八三七）一月～六月
城内稲荷社大破に付願	旧福昌院文書	甲府城内の稲荷社破損に関する資料。		甲府勤番期	天保十三年（一八四二）
在家塚村瓦資料		城内修復に用いる瓦に関する資料。		甲府勤番期	年不詳
修復関連文書三		城内11箇所への修復に関する入札資料。	個人	甲府勤番期	安政三年（一八五六）
御勝手帳	内閣文庫	城内修復に関する幕府勘定所における勝手方の資料。	国立公文書館	甲府勤番期	文久二年～慶応三年（一八六二～一八六七）
甲府城内太鼓櫓 其外不用之建物 并囲塀之儀修繕 につき伺		太鼓櫓その他不用建物の払い下げに関する資料。	山梨県立図書館	近代以降	明治七年（一八七四）五月十三日
甲府城内建物払 下記	甲州文庫 甲093・4- 289	本丸櫓等城内建物払い下げに関する資料。	山梨県立博物館	近代以降	年不詳
甲府城内外土塀 一切入札払下		城内外の土塀払い下げに関する資料。	山梨県立図書館	近代以降	明治九年（一八七六）五月八日



## 8) 城絵図・城下絵図

甲府城を描いた絵図には、城郭の曲輪の位置や周囲の地形などを描いた城絵図と、城下町に重点を置いて描いた城下絵図があり、このほかに御殿図や鳥瞰図なども合わせると約 180 点が確認されている。

絵図の集成及び調査については、昭和 44 年に甲府城総合学術調査団により本格的に始められ、山梨県教育委員会が刊行した『甲府城総合調査報告書』には合計 7 点が集成されている。その後、平成 15 年に県埋蔵文化財センターが刊行した『県指定史跡甲府城跡』では、75 点の絵図が掲載され、さらに報告書に掲載されなかったものを含めるとこの段階で 93 点が把握されている。また、平成 21 年刊行の『甲府城跡保存活用等調査検討委員会報告書』では、新たに発見された 6 点の絵図を掲載し、このうち京都大学大学院工学研究科建築学専攻が所蔵する『甲府（甲州）城並近辺之絵図』は、寛永 13 年から慶安 3 年頃に成立した甲府城絵図の中でも最古段階に位置づけられるものとされた。また、導線の描き方や精度の高さから『正保の城絵図』に近いものと推定された。さらに平成 25 年刊行の『県指定史跡甲府城跡鉄門復元整備事業報告書』では、新たに 10 点の絵図を掲載し、このうち公益財団法人三井文庫が所蔵する『甲州府中町之図』は、『甲府（甲州）城並近辺之絵図』に類似するが、年代的にはこれを若干遡るものとされた。一方、平成 29 年刊行の『県指定史跡甲府城跡-甲府城跡総合調査検討委員会報告書』では、これまであまり調査の及んでいなかった軍・兵学系の絵図を含む 52 点が新たに確認された。

甲府城絵図については、城絵図が最も多く確認されている。絵図の描かれた年代が明確なものは少なく、ほとんどはおおよその年代観が与えられる。また、甲府城築城期にあたる天正 18 年（1590）から慶長 5 年（1600 年）に描かれた絵図は現在までに確認されておらず、築城者の浅野家にかかる絵図「幸長公甲州府中城図」（広島市立中央図書館浅野文庫）が城郭図としては築城期に近いものと考えられている。

以下に代表的な城絵図の特徴と年代について紹介する。

### ○『甲州府中之城図』弘前市立弘前図書館所蔵

成立推定年代：天正 18 年（1590）～

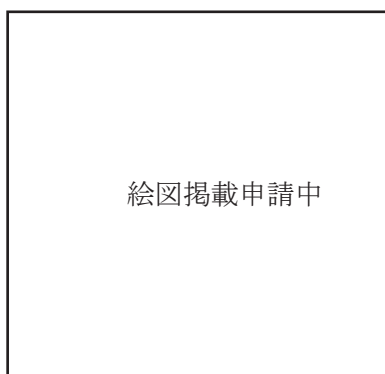
牧野文庫に含まれたもの。築城後間もない甲府城を描いたと見られる絵図で、清水曲輪には建物群が描かれる。また楽屋曲輪の南西部分の堀の一部には石垣の表記は見られない。堀に沿って描かれた樹木表現や大手門前に「下馬」と書かれた高札が描かれている。また大手門付近には溜まり水が描かれている。

絵図掲載申請中

○『甲州府中町之図』三井文庫

成立推定年代：元和九年（1627）～寛永十八年（1641）

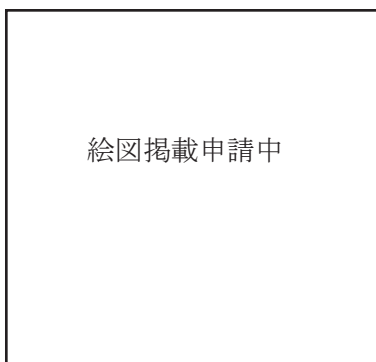
三井家連家である永坂町家4代三井高陰（宗養）のコレクション「藁陰舎（わらびさしのや）」文庫に含まれる。甲府城と城下町を詳細に描いており、城内だけでなく城下の建物も具体的に描いている。城内の建物は、建物概観と部分的にその間口や長さ、石垣の間数が記載される。城下については、十数名の人物名や屋敷内の建物配置が描かれる。また町名は詳細に描き込まれ、寺社名とともに墨書と朱書により柳沢時代などに変更された新旧の名称を記載している。



○『甲府城並近辺之絵図』京都大学大学院工学研究科吉田建築系図書館所蔵

成立推定年代：寛永十三年（1636）～慶安三年（1650）

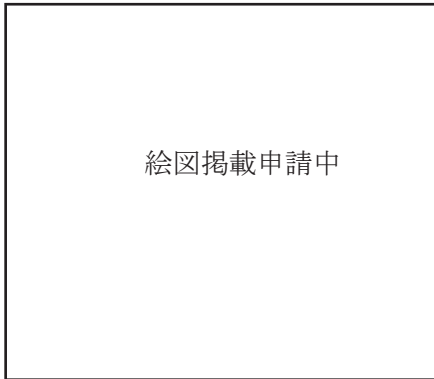
甲府城と城下町及び主要街道を詳細に描いている。甲府城については城内の櫓、門、蔵などの建物を詳細に描き、建物、堀、石垣等の規模を具体的に詳細に記している。城下町については、主要街道とその他の道とを区別して描き、町名、地名、寺社名や特定の屋敷地についても区画を表記した上で名前を記載している。



○『楽只堂年録』柳沢文庫所蔵

成立年代：宝永二年（1705）

柳沢吉保の日記である『楽只堂年録』第173巻宝永二年九月二十六日部分に綴じ込まれている絵図。宝永年間の甲府城の様子が細部にわたって記されている。曲輪、門の名称が記され、御殿などの建物についても詳細を知ることができる。石垣の規模についても情報が多く、堀部分については水上からの高さも記されている。



○『甲府城絵図』山梨県立博物館所蔵

成立年代：元文四年（1739）

書き込みから元文四年三月に作成されたものとわかる。堀の規模や城内の面積、建物の規模、狭間の数など、この絵図からえら得る情報は非常に多い。元文四年には城内楽屋曲輪の殿舎の取り壊しが行われている。これと関連して作成された絵図の可能性も考えられる。



○「甲府城」『日本城郭資料集』（国立国会図書館）

成立年代：明治7年

陸軍省により測量、作成されたものである。明治初年に甲府城内に残っている建物を確認することができる。また、城内4箇所について断面図が描かれているのが特徴である。その絵図の正確さから、明治初年の甲府城の姿を知る上で重要である。



## 9) 古写真

これまで確認した甲府城に関する古写真資料は、幕末から明治初期の資料は非常に少なく、建物に関する情報は極めて限られたものとなっている。また、明治10年代には勸業試験場として利用されている状況を撮影したものが数点みられるものの、資料は比較的少なく、所有者も限られている。明治30年代以降は、資料の数も増加し、特に明治39年以降は一府九県連合共進会や皇太子御巡幸等の各種催しの記念に撮影されたものがある。

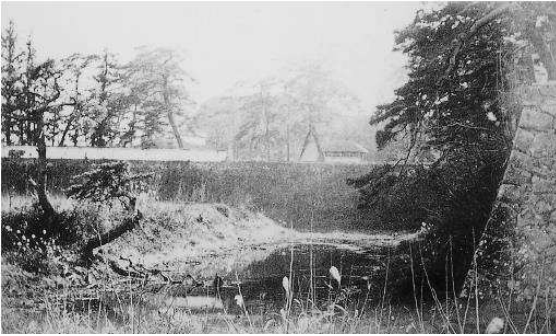
これらのうち、主要を以下の表に示しているが、これ以外の資料も含め、撮影方向は、甲府城外南側からのもの、城内屋形曲輪から東側を撮影したものが多い。それ以外の方向から撮影した資料は比較的少なく、特に北側の清水櫓や山手門を撮影した資料は現段階で確認されていない。

表 主要古写真一覧

番号	撮影対象	年代	概要	所蔵
1	甲府城跡（全景）	幕末～明治初期	北東から撮影。稲荷櫓・本丸櫓・数寄屋櫓・鉄門等が写る。	山梨県立博物館
2	天守台、本丸、稲荷曲輪、内堀	幕末～明治初期	北（山の手門橋付近）から撮影。本丸櫓・煙硝蔵が写る。	個人
3	鍛冶曲輪	明治10年代	北から撮影。鍛冶曲輪に葡萄酒醸造所施設が写る。	山梨県立博物館
4	二の丸	明治30年代	南西（楽屋曲輪）から撮影	山梨県立博物館
5	天守台、稲荷曲輪	明治30年代	北（花畑付近）から撮影。	甲府市教育委員会
6	天守台、天守曲輪	明治30年代	南（鍛冶曲輪）から撮影。	山梨県立博物館
7	楽屋曲輪、大手門、内堀	明治30年代	南東より撮影。大手門木橋が写る。	甲府市教育委員会
8	楽屋曲輪、柳門	明治45年	南西より撮影。皇太子巡幸の様子。	甲府市教育委員会
9	本丸、二の丸	大正時代	北西（屋形曲輪）から撮影。	甲府市教育委員会

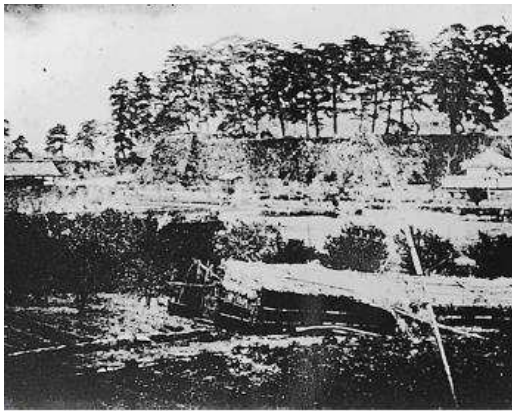


山梨県立図書館所蔵



出展：「大日本全国名所一覽-イタリア公使屋敷の明治写真帖」  
P86（2000年株式会社平凡社）

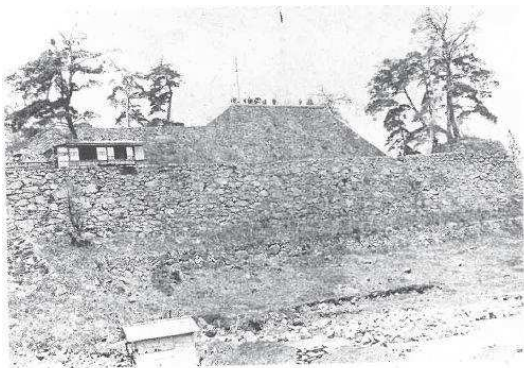
山梨県立図書館所蔵



中IV-4-1-9 山梨県立図書館

山梨県立図書館所蔵

掲載申請中



史IV-4-1-20 山梨県立図書館

掲載申請中